

田道町遺跡

—B・C地点発掘調査概報

1993

石巻市教育委員会
石巻市農業協同組合



田道町遺跡C地点出土木簡

序

仁徳天皇五十五年に上毛野田道が蝦夷と戦い敗死した伊寺水門は、古来石巻であると信じられています。もとよりこのことは史実そのままではありません。しかし、この上毛野田道にちなんで名付けられた田道町には、その命名の由来にふさわしく、古墳時代から平安時代にかけての遺跡があります。

平成3年この田道町遺跡での宅地開発計画の協議があり、確認調査を行ったところ、種々の遺構・遺物が確認されました。そこで、保存協議を行い、計画を変更し、公園用地として遺構の一部を保存し、残りの部分は、事業者負担で発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、竪穴住居跡5軒、多数の掘立柱建物跡等を検出し、木簡や銅製帶金具等の重要な遺物も出土いたしました。

文化財は、先人の残した貴重な文化遺産であり、石巻に生きた人々の生活のありかたを語ってくれるかけがえのない資料です。この発掘調査により石巻の古代史を多少なりとも解明することができたら幸いと思います。

この発掘調査にあたり特段のご配慮を賜った石巻市農業共同組合、地主の武内きみ子氏とご家族の皆様、調査にご協力をいただいた各氏・各機関に紙面を借りまして感謝申し上げます。

平成5年3月

石巻市教育委員会教育長 阿 部 宏

発刊の辞

田道町遺跡は古墳時代から平安時代までの遺跡として知られています。

当農業協同組合が、この田道町遺跡で宅地開発を計画し、確認調査を実施していただいたところ、多くの遺構・遺物があることがわかり、開発計画を変更して遺構の一部を保存し、残りの部分は発掘調査を実施することとなりました。

調査の結果、古代の住居跡や建物跡等、数多くの遺構遺物が発見されたとのことです。特に、延暦年間の木簡が出土し、東北の古代史に一石を投じることとなったということも聞き及んでいます。

この度、その発掘調査結果の報告書が刊行されることとなりました。当農業協同組合がこのような形でかかわった発掘調査の報告書により、石巻地域の古代史、ひいては日本古代史の研究に役立つ貴重な資料が永く残ることは誠に意義深いものがあります。

最後になりましたが、この調査を実施していただきました石巻市教育委員会、ご指導を賜りました宮城県教育委員会、地主の武内きみ子氏に厚く感謝の意を表します。

平成5年3月

石巻市農業協同組合

組合長理事 井 上 昭 二

目 次

I	発掘調査に至る経過	1
II	環境と立地	1
III	基本層位	3
IV	発見された遺構と出土遺物	4
1.	住居跡	4
2.	掘立柱建物跡	15
3.	土 壤	27
4.	焼土遺構	30
5.	溝 跡	30
6.	その他の遺物	32
V	田道町遺跡C地点出土木簡について	35
VI	ま と め	37
VII	写 真 図 版	39

例 言

1. 本書は、石巻市農業協同組合の宅地開発に伴う田道町遺跡の事前調査の概報である。
2. 調査は、石巻市教育委員会が主体となり、石巻市教育委員会社会教育課文化係が行った。
3. 土層等の色調表記については、「新版標準土色帳」9版（小山・竹原:1989.5、日本色研株式会社）を利用した。
4. 本書の第1図は建設省国土地理院発行1/25,000「石巻」を複製して使用した。
5. 本書の編集・執筆は石巻市教育委員会社会教育課文化係佐々木淳・芳賀英実・岡 道夫が行った。
6. 出土した遺物および調査記録類は石巻市教育委員会で保管している。

調査要項

1. 遺跡名 田道町遺跡B・C地点
2. 遺跡所在地 宮城県石巻市田道町二丁目
3. 調査対象面積 2,800m²
4. 調査主体者 石巻市教育委員会
5. 調査期日 平成3年9月24日から平成4年1月18日
6. 調査員 石巻市教育委員会社会教育課
佐々木 淳 芳賀 英実 岡 道夫
木暮 亮
7. 調査指導 宮城県教育庁文化財保護課
8. 発掘作業員 相沢 敏郎 秋沢ちよ子 大友 隆哉 勝又 正男
亀山美代子 穀田 吉夫 佐藤 心一 鈴木 友春
長谷川信雄 松川 利克 目黒たみ子 八島 寛
山上カチ子
9. 整理作業員 相沢利喜子 西條 芳子 目黒たみ子
10. 調査協力 国立歴史民俗博物館 福島県立博物館 会津若松市教育委員会
宮城県教育庁文化財保護課 東北歴史資料館
石巻文化センター 石巻市建設部道路課 石巻市総務部総務課
石巻市農業協同組合 株式会社木村正友設計事務所
武内きみ子
平川 南 熊谷 公男 桑原 滋郎 藤沼 邦彦 進藤 秋輝
白鳥 良一 小井川和夫 阿部 恵 阿部 博志 梅村 聖一
村田 晃一 佐藤 敏幸 中村 光一 三宅 宗議 茂木 好光
佐藤 雄一 木村 敏郎 石塚 和雄 鈴木 東行 川名 純一
石垣 宏 末永 聰行

I 発掘調査に至る経過

平成3年4月、田道町遺跡A地点を発掘調査中に、その隣接地で石巻市農業協同組合によるアパート建設（B地点）及び宅地開発（C地点）の計画があることを、その計画の設計を請け負った設計事務所から石巻市教育委員会に対し報告があった。そこで事業者に対し、宮城県教育委員会と早急な協議が必要である旨を回答した。

平成3年4月30日、事業者から宮城県教育庁文化財保護課長あて協議書が提出された。協議の結果、9月下旬から事業者の経費負担で遺構確認調査を実施することとなり、9月24日にB地点から調査を開始した。

調査を開始してすぐ、B地点には遺構遺物がないことが判明し、調査を終了した。引き続き10月3日からC地点の調査に入り、今度は、堅穴住居跡や建物跡等多数の遺構を検出した。そこで事業者・宮城県教育委員会・石巻市教育委員会の三者で遺構の保存について協議したところ、造成計画を変更し、公園の位置を遺構のないところからあるところへ移し、残りの約2,600平方メートルについて記録のための発掘調査を実施することとなり、確認調査に引き続き事前調査に着手した。

平成3年12月15日に、現地説明会を行い、一般市民170人の参加を得た。

調査は、平成4年1月18日に終了した。

本概報では、遺構、遺物の出土したC地点のみ報告することとする。

II 環境と立地

田道町遺跡は、JR東日本仙石線陸前山下駅の東側の住宅街、石巻市田道町一丁目から二丁目にかけて存在する遺跡で、標高1.5から1.8メートルの沖積平野の微高地上にある。

田道町遺跡は、古墳時代から平安時代までの土器が散布する遺跡として知られ、過去には南小泉式の土師器壺の完形品も出土している。今回の調査区から南東約100メートルの地点で、昭和51年（1976）1月に当教育委員会が遺構確認調査を実施している。その結果、古墳時代から平安時代にかけての「溝状遺構」・「土壤状遺構」をいくつか確認している。また、北西側数十メートルの地点では、この調査直前の平成3年4月から8月にかけて約2,000平方メートルの面積を発掘しており（A地点）、古墳時代前半（塙釜式期）や奈良～平安時代の遺構、遺物を確認している。

東側約400メートルには墨書き土器が出土している清水尻遺跡があり、西には隣接して横堤遺跡がある。清水尻遺跡は、8世紀後半以降の牡鹿郡衙とする説のある遺跡である。

田道町遺跡は、石巻市西部の平野部に位置する。本遺跡の北約1キロメートルのところで南

流してきた北上川が東に向きを変えている。北上川は、その後再び流れを南に変え、本遺跡の南東約4キロメートルのところで太平洋に注ぐ。南東約500メートルには標高50数メートルの鷲山丘陵（日和山丘陵）が聳え、約3キロメートル南は海岸であり、仙台湾の支湾である石巻湾に面している。

本遺跡付近の地層は旧河底をうずめた堆積物で、下位から、蛇田層・釜層・沼向層・中岸層・雲雀野層である。このうち中岸層は、河川の氾濫時に堆積した砂泥による自然堤防であり、本調査で地山と認定した層である。

微地形区分図によれば、本遺跡付近は、発達した自然堤防と後背湿地となっている。しかし、昭和30年代の航空写真を見るかぎり、本遺跡のエリアは全て微高地となっており、本遺跡は、自然堤防上に立地すると考えらる。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	田道町遺跡	古墳・奈良・平安	8	水巣寺貝塚	縄文・奈良・平安	15	釜西古墳	古墳
2	清水尻遺跡	古墳・奈良	9	梅ヶ丘塗跡	奈良・平安	16	新金沼遺跡	古墳・平安
3	横堤遺跡	縄文・奈良・平安	10	石巻城跡	中世	17	竹下船跡	中世
4	明神山下貝塚	縄文	11	五松山羽賀遺跡	弥生・古墳	18	水貫山遺跡	平安
5	明神山経塚	近世	12	漆小学校遺跡	奈良	19	箕輪山貝塚	奈良・平安
6	明神山遺跡	平安	13	西三軒屋遺跡	古墳・近世			
7	羽黒山遺跡	平安	14	釜東古墳	古墳			

(註) 宮城県教育委員会 宮城県文化財調査報告書第125集 宮城県 遺跡地図 昭和62年「第58番石巻」に所収の古墳時代から平安時代までの遺跡である。

第1図 田道町遺跡と周辺の遺跡

III 基本層位

今回の調査報告は田道町遺跡B地点とC地点であるが、B地点は開田などでA地点で地山とした層が削平されており、遺構、遺物は検出されなかったので説明は省略する。

C地点の層位は大別すると4層に分けられる。地山面は調査区中央部が平坦であり、西側および東側に向かって緩やかに傾斜している。また、中央部は地山面まで攪乱がおよんでいるところがある。

〔第Ⅰ層〕

現在の畑の耕作土である。黒褐色砂質シルト層で、層中には遺物やビニール等が混入している。層の厚さは調査区の中央が30~40cmでほぼ水平に堆積しており、調査区東西壁に向かって緩やかに傾斜している。西側で約50cm、東側で約60cmの厚さがある。

〔第Ⅱ層〕

旧耕作土である。暗褐色砂質シルト層で、遺物や礫が混入している。層の厚さは10~20cmで調査区のはば全域で見られるが、一部が第Ⅰ層で分断されているところがある。また、調査区中央部では地山面まで達している。



第2図 調査区位置図

〔第Ⅲ層〕

黒褐色シルト質砂層で、層中には遺物や礫、地山砂等が混入している。層の厚さは10~20cmである。粘性はややあり、しまりがある。調査区中央では地山面まで耕作がおよんでおり、わずかに確認されるのみである。遺構はこの層を掘り込んでいるものと層の下面から掘りこんでいるものがある。

〔第Ⅳ層〕

黄褐色シルト質砂層の地山である。調査区中央部は耕作等によって削平されているようであるが、中央部は平坦であり調査区西側および東側に向かって緩やかに傾斜していたと思われる。調査区中央部の遺構は、ほとんどこの地山面より掘り込まれている。

IV 発見された遺構と出土遺物

今回の調査では、竪穴住居跡が5軒、掘立柱建物跡が21棟、溝跡12条、土壙10基以上、ピット多数が検出された。これらの遺構や堆積土、表土などからは、土師器、須恵器、土製品、石器、銅製帶金具、木簡などが出土した。ここでは、遺構、遺物の概要を記述し、詳細は本報告で述べることとする。

1. 住居跡

竪穴住居跡は5軒検出された。そのうちの1軒は古墳時代のもので、それ以外の住居跡は奈良~平安時代のものである。住居跡は、いずれも調査区中央の平坦面に立地している。ただし、この平坦面は耕作等によって削平されており、遺構の残りはよくない。特に奈良~平安時代の住居跡は壁の立ち上がりがほとんどなく、周溝跡で範囲が確認された。古墳時代の住居跡は、1辺が4m以下の小型であるが、奈良~平安時代の住居跡は、1辺が7~10mと大型である。

これらの住居跡からは、土師器、須恵器、土製品、鉄製品、銅製帶金具等が出土している。

第1号住居跡

〔位置〕 調査区中央よりやや西側、14・15・16-C・D・E・Fに位置している。

〔重複〕 第9号・12号掘立柱建物跡に切られ、第8号土壙を切っている。また、南側を拡張している。

〔平面形・規模〕 規模は南北約8m、東西約8.2mで、平面形はほぼ正方形を呈しているが、北西隅の周溝が北側に延びている。古いほうの住居跡は東西が約7.6m程度であった。

〔堆積土〕 堆積土は、削平により周溝からのみ検出された。新しい住居の堆積土は3層から成り、褐色~暗褐色の砂層である。層中には少量の炭化物や地山砂を含んでいる。古いほうの住居の堆積土は暗褐色砂層の1層が確認された。この層からは炭化物等の混入は見られなかった。

〔壁〕 壁は削平によりほとんど残存していない。壁残存高の最大値は約5cmである。

— 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34

A —

B —

C —

D —

E —

F —

G —

H —



— 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 —

W-66 W-60 W-54 W-48 W-42 W-36 W-30 W-24 W-18 W-12 W-6 I

S-6 —

J —

K —

S-12 —

L —

M —

S-18 —

N —

O —

S-24 —

P —

Q —

S-30 —

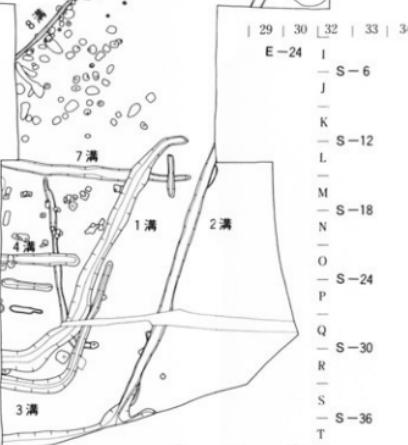
R —

S —

S-36 —

T —

U —



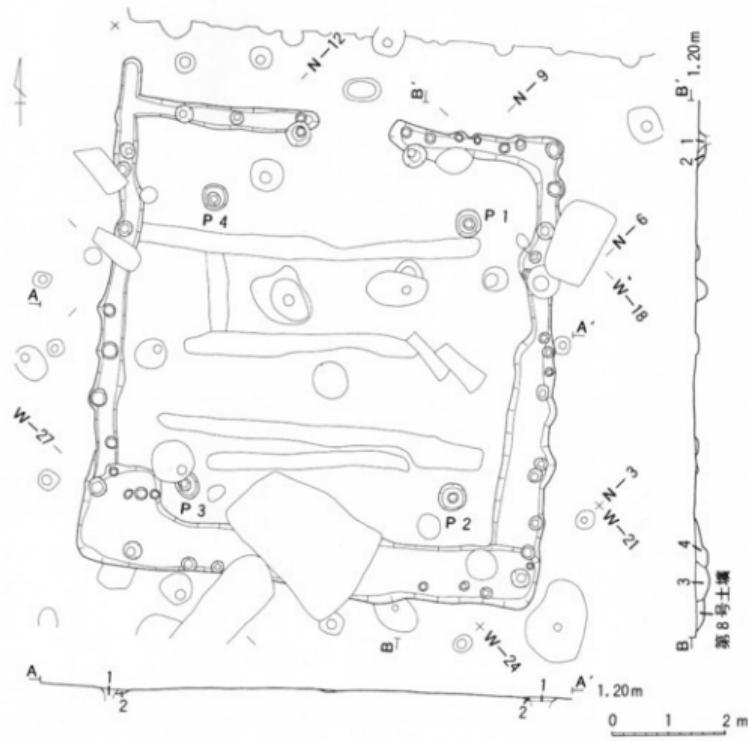
— 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 —

1 / 400 第3図 田道町遺跡C地点遺構配置図

〔床面〕地山を床面としている。床面は中央部がやや高まっているが、概ね平坦と言つていいだろう。床面からの遺物の検出はあまり見られなかった。

〔カマド・炉〕確認されなかつたが、住居北側の周溝がほぼ中央で途切れているので、この部分にカマドがあつたと思われる。

〔柱穴〕床面から4個のピットが確認された。また、壁際の周溝から多数のピットが確認された。このうち床面で確認された4個のピットは住居平面形の対角線上に位置しており、掘り方が直径約44~50cmの円形を呈し、深さ約28~49cm、柱痕跡が直径約18~22cmの円形を呈していることから、これらが主柱穴と考えられる。壁際周溝内のピットは直径約12~22cmで円形を呈している。



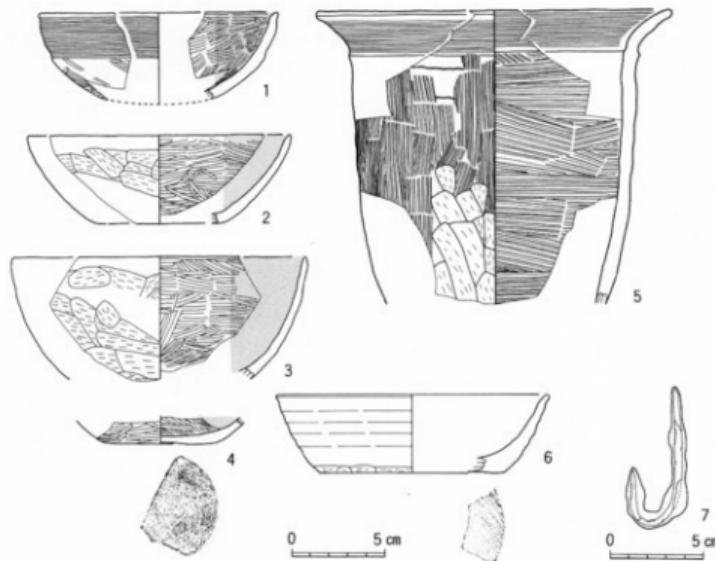
土種名	土 色	土 性	粒性	しまり	調 砂
1種	10Y R 3/2 姫蘭色	細	全し	なし	
2種	10Y R 4/4 錦 色	細	全し	ややあり	地山砂を含む

土種名	土 色	土 性	粒性	しまり	調 砂
3種	10Y R 2/2 黒蘭色	細	全し	なし	炭化物を少量含む
4種	10Y R 3/3 姫蘭色	細	全し	ややあり	田圃地

第4図 第1号住居跡

〔周溝〕住居北側の中央部で一部途切れているが、他は残存している。規模は幅が約40~80cmで、深さが約5~20cm、断面形は逆台形を呈している。

〔出土遺物〕土師器坏・椀・甕、須恵器坏が検出された。また、周溝底面から鉄製釣針が出土している。



番号	種別	外観調査	内観調査	口径mm	底径mm	厚さmm	備考	写真回数
1	土師器 瓢	(1)ココナツ(2)ハラケズリ→ハラギキ	ハラギキ+黑色施釉	12.6	—	(4.1)	丸底と思われる	1
2	土師器 池	(1)ハラケズリ (2)手持ちハラケズリ	ハラケズリ+黑色施釉	14.0	6.9	4.7		2
3	土師器 楕	楕円ハラケズリ	ハラケズリ+黑色施釉	15.6	—	(6.5)		3
4	土師器 盆	(1)ハラギキ	ハラギキ+黑色施釉	—	8.0	(1.2)	底面に「×」の織紋あり	4
5	土師器 甕	(1)ココナツ (2)ハケメ→ハラケズリ	(1)ココナツ (2)ハケメ	19.0	—	15.6		5
6	須恵器 瓢	(1)ロクロ→供器下端 手持ちハラケズリ	ロクロ	14.6	9.8	4.35	(底)赤切り(脚?)	6
7	鉄製釣針	—	—	—	—	—	—	7

第5図 第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡

〔位置〕調査区中央よりやや西側で、16~20-A~Eに位置している。

〔重複〕第12号掘立柱建物、第3号住居に切られており、第4号住居を切っている。

〔平面形・規模〕北西隅が未掘であるが、南北約10.2m、東西約9.6mでは方形状を呈している。

〔堆積土〕削平により堆積土の残りは悪く、地山の砂を含む黒褐色砂層が確認されたのみである。

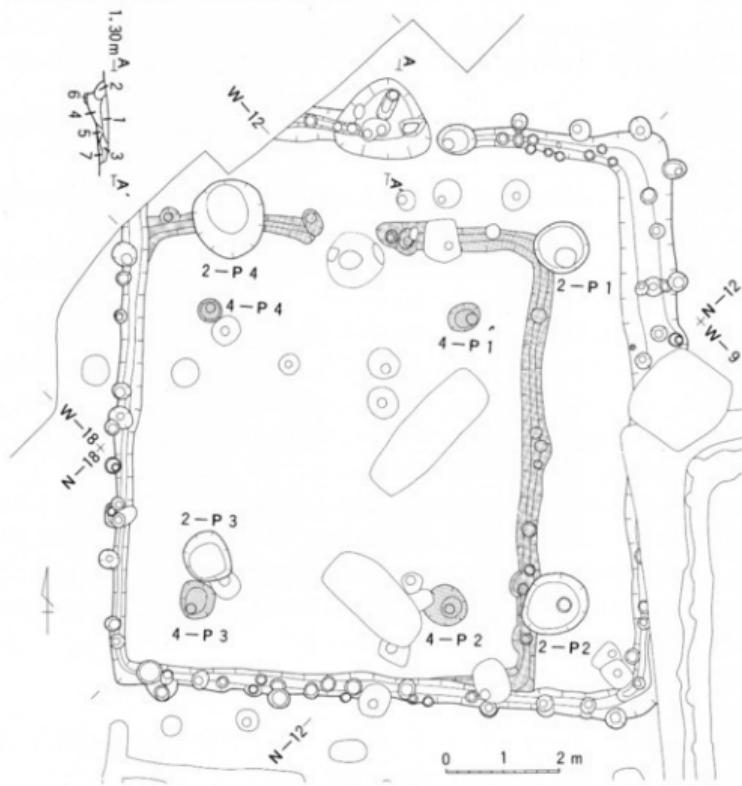
〔壁〕削平によりほとんど残存していない。西側で約4cm、東側で約1cm確認された。

〔床面〕 地山を床面としている。概ね平坦である。

〔カマド・炉〕 住居北辺の中央部でカマドの袖と掘り込みが確認された。ただし、煙道は確認されなかった。

〔柱穴〕 床面で住居平面形の対角線上に4個のピットが検出された。これらは主柱穴と考えられ、ピットの掘り方は長軸約96~140cm、短軸約90~126cmの楕円形を呈し、深さ約53~67cmである。また、柱痕跡は直径約22~30cmの円形を呈している。これらの他に壁際の周溝内に直径約16~30cmのピットが多数確認された。

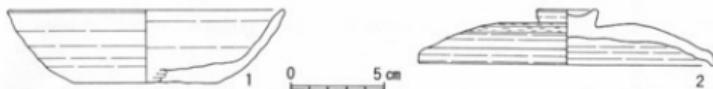
〔出土遺物〕 須恵器壺・蓋が出土している。



土壌No.	土 色	土 性	粒性	じまり	備 考
1号	5 YR 5/2 塩水褐色	シルト質粘	なし	あり	礫状石粒・塊石粒を含む
2号	5 YR 5/2 塩水褐色	シルト質粘	なし	あり	礫状石粒・塊石粒・土塊を含む
3号	5 YR 5/2 塩水褐色	シルト質粘	なし	あり	礫状石粒・塊石粒・炭化物を含む
4号	5 YR 5/1 黒褐色	砂	なし	あり	塊石粒・炭化物を含む

土壌No.	土 色	土 性	粒性	じまり	備 考
5号	5 YR 5/2 塩水褐色	シルト質粘	なし	あり	地山の砂を含む
6号	10 YR 5/2 黑褐色	砂	なし	ややあり	地山の砂を含む
7号	10 YR 4/4 黑褐色	砂	なし	あり	地山

第6図 第2号・第4号住居跡



第7図 第2号住居跡出土遺物

第3号a住居跡

〔位置〕 調査区中央よりやや西側、第2号・4号住居の東側、17-21-D-Gに位置している。

〔重複〕 第14号掘立柱建物跡に切られてしまっている。

〔平面形・規模〕 西辺が北西隅に向かってやや広がって行くが、南北約8.7m、東西約8.8mのほぼ方形を呈している。

〔堆積土〕 削平により床面上にはほとんど堆積土は見られなかった。堆積土は周溝内で確認され、ほとんど黒褐色砂層であり、炭化物と遺物を含んでいる。

〔壁〕 壁は西辺で僅かに確認されたほかは、削平されており確認されなかった。壁の残存高は約9cmで、やや緩やかに外傾しながら立ち上がっている。

〔床面〕 地山を床面としており、西側の一部がやや高いが全体的に見れば、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕 カマド施設は削平により確認されなかったが、周溝が住居の北辺中央部で途切れている。また、その周辺に焼土が検出されているので、ここにカマドがあったと考えられる。

〔付属施設〕 住居北側でカマドの東側に、貯藏穴と思われる土壠が確認された。規模は長軸約110cm、短軸約74cm、深さ約20cmで梢円形を呈している。

〔柱穴〕 住居平面形の対角線上で床面から4個のピットが確認された。これらのピットの掘り方は、長軸約90~120cm、短軸約70~110cm、深さ約51~69cmで、平面形は梢円形を呈している。柱痕跡は直径約18cmで円形を呈しており、3箇所で柱材が検出された。これら対角線上の4個のピットが主柱穴と考えられる。また、周溝内、壁際で掘り方の直径が約14~40cmで平面形が円形ないし梢円形を呈したピットが多数確認された。

〔出土遺物〕 土器壺、須恵器壺・甕、鐵製紡錘車・刀子等が出土している。

第3号b住居跡

〔位置〕 調査区中央よりやや西側、第2号・4号住居の東側、17-21-D-Gに位置している。

〔重複〕 第14号掘立柱建物跡、第3号a住居跡に切られている。

〔平面形・規模〕 規模は南北約7.4m、東西約7.6mで、平面形は方形を呈している。

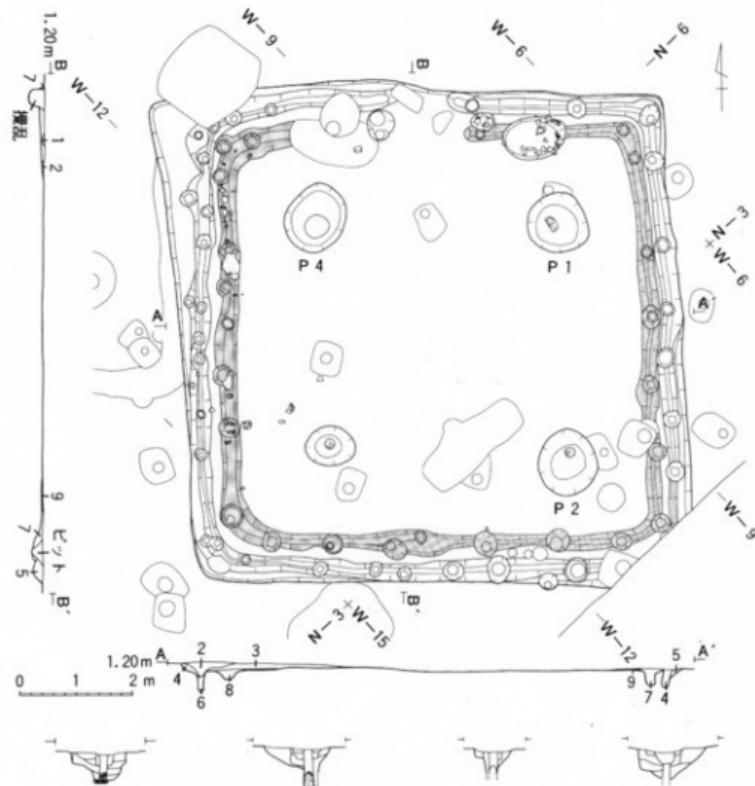
〔堆積土〕 床面上は削平により堆積土がなく、周溝内とピット内で確認された。概ね黒褐色砂層であり、周溝内堆積土中には炭化物を少量含んでいる。

〔壁〕 第3号a住居構築の際に削平されたと思われる。

〔床面〕 ほぼ平坦である。概ね地山を床面にしているが、周溝から約1mの幅で全周が貼床になっている。

〔カマド・炉〕 第3号a住居と同様に北側中央部の周溝が途切れており、この位置にカマドがあったと思われる。

〔柱穴〕 主柱穴は、第3号a住居の主柱穴の掘り方によって切られていると思われる。周溝内で、掘り方の直径約20~40cmで円形ないし梢円形を呈し、柱痕跡が直径約15cmの円形のピット



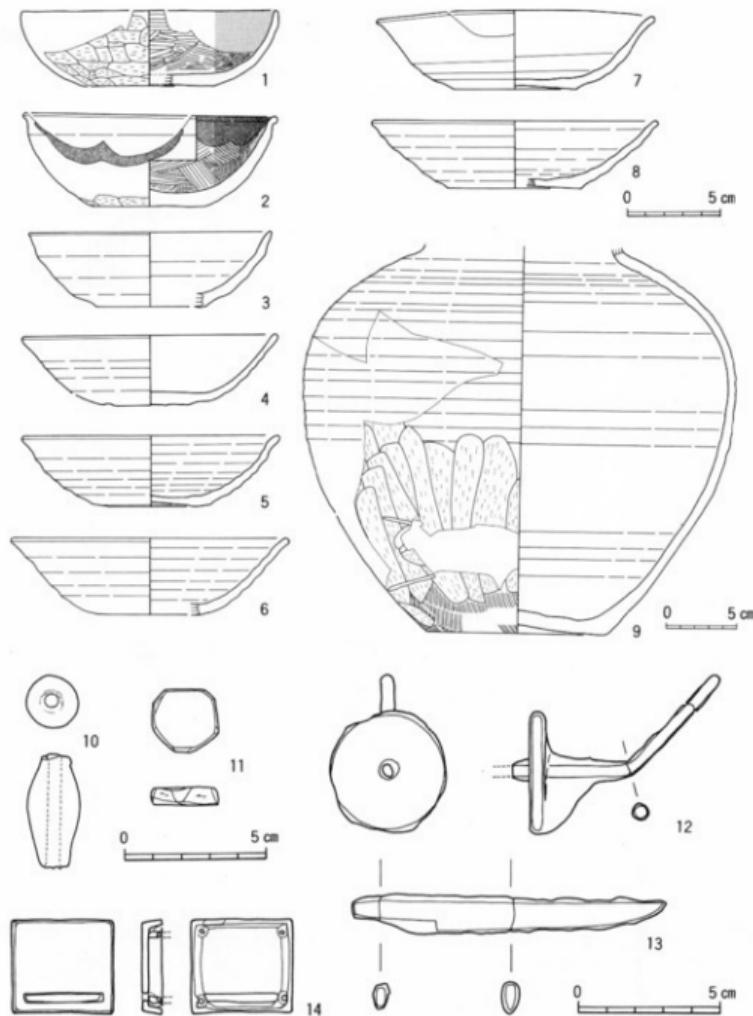
土壌No.	土色	土性	粒性	しまり	塊	号
1号	5 Y R 2/2	褐色	砂	なし	ややあり	壁面を含む
2号	10Y R 3/2	黒褐色	シルト質粘土	弱	ややあり	炭化物・焼土粒・遺物を含む
3号	7.5 Y R 3/2	黒褐色	砂	なし	ややあり	炭化物・遺物を含む
4号	10Y R 3/2	黒褐色	砂	なし	弱	炭化物少・遺物を含む
5号	7.5 Y R 3/2	黒褐色	砂	なし	ややあり	炭化物少含む
6号	10Y R 3/2	黒褐色	砂	なし	弱	柱痕跡

土壌No.	土色	土性	粒性	しまり	塊	号
7号	10Y R 3/2	黒褐色	砂	なし	弱	
8号	10Y R 3/2	黒褐色	砂	なし	ややあり	3号住
9号	10Y R 3/2	黒褐色	砂	なし	あり	柱跡

第8図 第3号a b住居跡

が多数確認された。

【出土遺物】銅製帶金具（巡方1）が出土した。この他に土師器、須恵器が僅かに出土したが、実測可能なものはなかった。



第9図 第3号a b住居跡出土遺物

番号	種別	外観・調査	内面・裏面	寸法(cm)	寸法(cm)	寸法(cm)	備考	写真回数
1	土器	〔上一側〕ハラケヅリ〔底〕手持ちハラケヅリ	ハラケヅリ+黒色施釉	13.5	7.0	4.0	残存部約1/2	10
2	土器	ロクロ→手持ちハラケヅリ〔底〕回転赤切り→手持ちハラケヅリ	ハラケヅリ+黒色施釉	13.6	6.2	3.9	口縁部に炭化物付着(打火器?)	11
3	土器	ロクロ	ロクロ	13.0	5.9	4.0	残存部約1/2	12
4	土器	ロクロ	ロクロ	13.7	4.1	3.75	残存部約1/2	13
5	土器	ロクロ	ロクロ	12.8	6.3	3.8	残存部約1/2	14
6	土器	ロクロ	ロクロ	14.9	5.6	4.3	残存部約1/2	15
7	土器	ロクロ	ロクロ	14.9	6.5	4.2	口縁部にゆがみあり	16
8	土器	ロクロ	ロクロ	15.3	7.1	3.6	残存部約1/2	17
9	土器	〔底上半〕ロクロ〔底子〕ロクロ	ロクロ	—	12.6	(27.1)	〔底〕手持ちハラケヅリ	18

第3号a b住居出土遺物観察表

第4号住居跡

〔位置〕 調査区中央よりやや西側で、16~20-A~Eに位置している。

〔重複〕 第12号掘立柱建物跡、第2号住居跡に切られている。

〔平面形・規模〕 住居の南辺および西辺は第2号住居跡に切られているが、概ね第2号住居の南辺および西辺と同位置であると考えられ、規模は南北約8.4m、東西約7.4mで、平面形が方形を呈していたと思われる。

〔堆積土〕 周溝内の堆積で、概ね黒褐色砂である。

〔壁〕 第2住居によって削平されている。

〔床面〕 地山を床面にしており、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕 第2号住居によってカマドの施設は壊されているが、住居北側の周溝が中央部で途切れしており、この部分に焼土および焼け面、カマドの袖があったと思われるところに粘土が確認されたので、この部分にカマドがあったと考えられる。

〔柱穴〕 住居平面形の対角線上の床面で4個のピットが確認された。これらは掘り方の長軸約42~76cm、短軸約40~70cmの梢円形を呈し、柱痕跡は直径約18~20cmの円形を呈しているもので、主柱穴と考えられる。この他に周溝内より掘り方の直径約14~24cmで、円形ないし梢円形を呈しているピットが多数確認されている。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器の小破片が僅かに出土しただけである。

第5号住居跡

〔位置〕 調査区中央で、第2号・4号住居跡の北東、22~24-B・Cに位置している。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 平面形は南東隅がやや膨らんでいるが、ほぼ方形を呈している。規模は南北約3.4m、東西約3.7mである。

〔堆積土〕 自然堆積で4層から成る。堆積土は黒褐色ないし暗褐色の砂層であり、層中に多量の炭化物を含むものもある。

〔壁〕 壁は床面よりやや外傾しながら立ち上がっており。壁の残存高は4~10cmである。

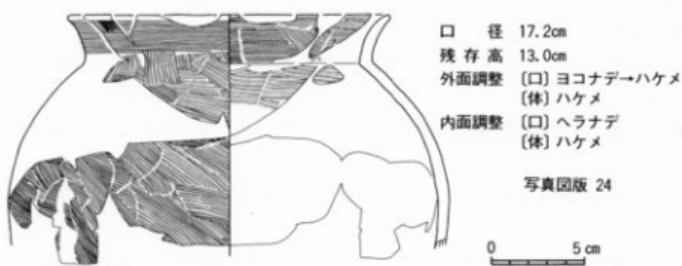
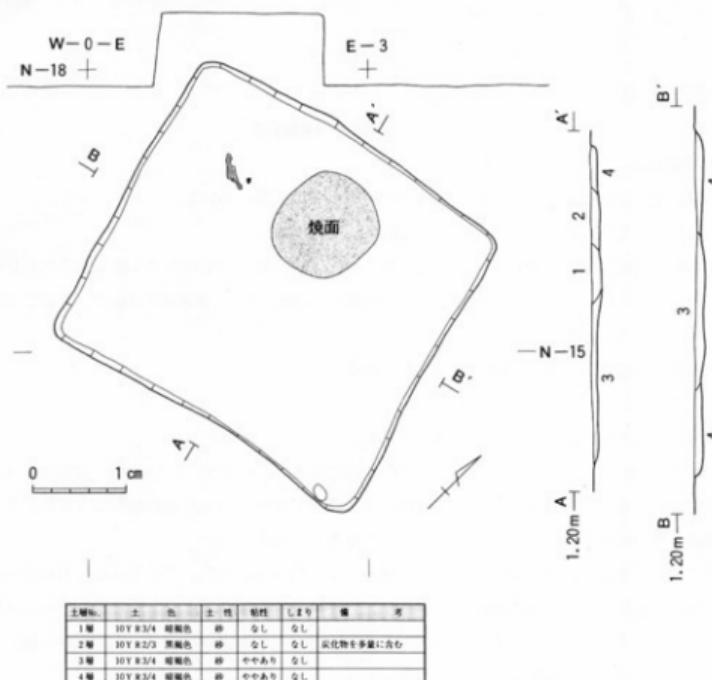
〔床面〕 地山を床面としている。中央より北側がやや低くなっている。この北側中央部の床面

で焼面が確認された。

〔カマド・炉〕住居北側中央部で南北約114cm、東西約100cmで楕円形を呈した焼面が確認され、地床炉と考えられる。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕土師器甕が出土している。



第10図 第5号住居跡・出土遺物

2. 掘立柱建物跡

今回の調査で多数のピットを検出し、21棟の掘立柱建物跡を確認することができた。掘立柱建物跡は、2間×2間と思われるものが5棟、2間×3間が7棟、2間×3間以上が1棟、これら以外に未掘の部分にかかるために大きさが不明のもの6棟が確認された。

掘立柱建物跡の大部分は、調査区の西側に密集しており、立て替えや切り合いが見られ、かなり年代幅があると思われる。遺物はあまり出土していない。ただし、2間×3間以上の掘立柱建物跡を切っているピットから木簡が出土した。

第1号 a 掘立柱建物跡

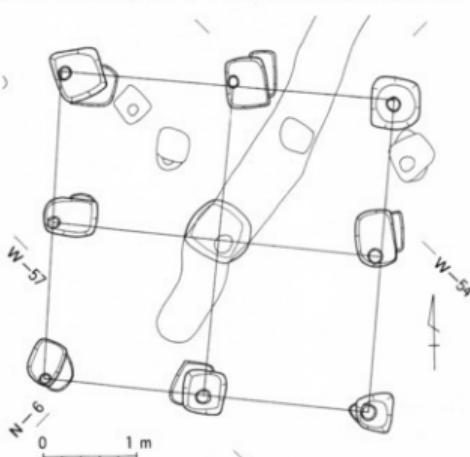
〔位置〕 調査区西側で第2号掘立柱建物跡の南、4-E・Fに位置している。

〔重複〕 第1号 b 掘立柱建物跡を切っている。また、第2号・16号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔規模〕 衍行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間は南北が概ね1.66m、東西が1.66~1.80mである。

〔柱穴〕 挖り方は一辺が44~66cmの方形を呈しているものと、長軸が48~60cm、短軸が40~50cmの長方形を呈しているものがある。柱痕跡は径が14~20cmの円形で、深さが17~34cmである。

〔埋土〕 概ね黒褐色シルト質砂である。埋土中に地山砂、炭化物を含んでいるものがある。



第11図 第1号 a b 掘立柱建物跡

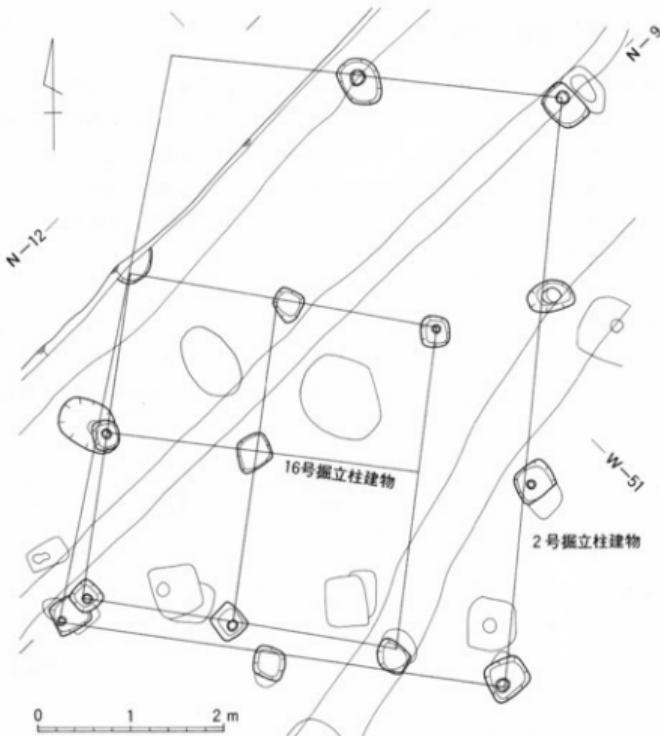
第2号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第1号掘立柱建物跡の北、4-6-D-Fに位置している。

〔重複〕 第16号掘立柱建物跡に切られている。また、第1号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

〔規模〕 衍行3間、梁行2間の南北棟である。柱間は衍行が東側柱列で北から2.1、2.0、2.2mである。梁行が南側柱列で西から2.26、2.52mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は、長軸が36~48cm、短軸が34~40cmの長方形ないし梢円形を呈している。柱痕跡は径が14~20cm、深さ12~36cmで円形を呈している。



第12図 第2号・第16号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第2号掘立柱建物跡の東、6～8-E～Gに位置している。

〔重複〕 第5号土壤に切られている。

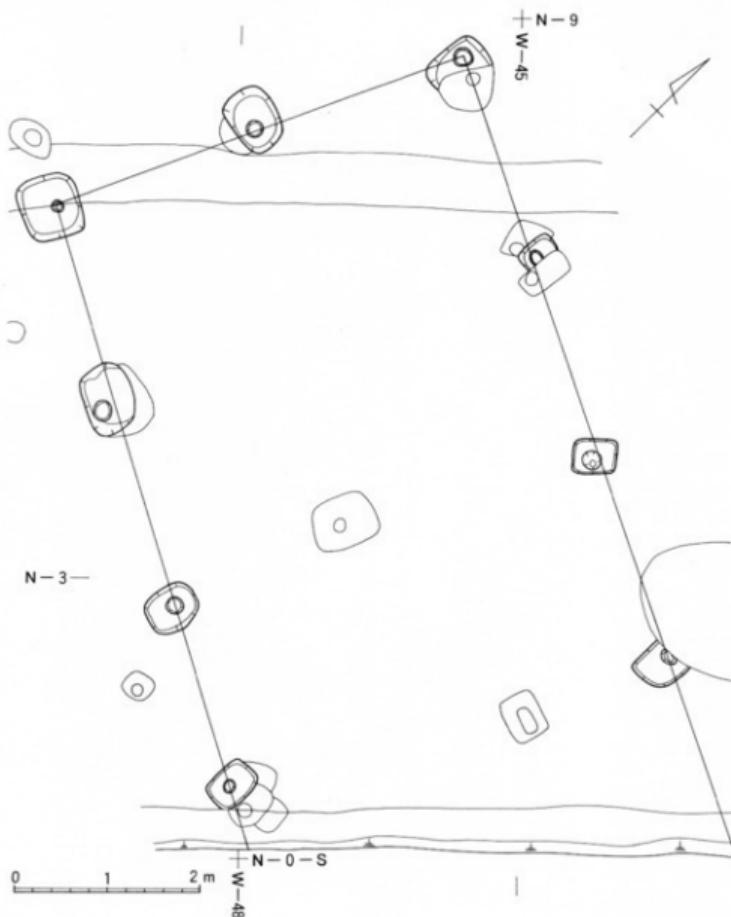
〔規模〕 衍行3間以上、梁行2間の東西棟である。柱間は衍行が北側柱列で西から2.26、2.26、2.20m、南側柱列で西から2.26、2.20、2.04mである。梁行が西側柱列で北から2.32、2.26mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は長辺が48～70cm、短辺が36～64cmの長方形を呈している。柱痕跡は径が14～22cm、深さ22～37cmで円形を呈している。

第4号a・b掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第2号掘立柱建物跡の北、7～9-B～Dに位置している。

〔重複〕 第4号a掘立柱建物跡が第4号b掘立柱建物跡を切っている。また、第17号掘立柱建物跡が重複しているが新旧関係は不明である。

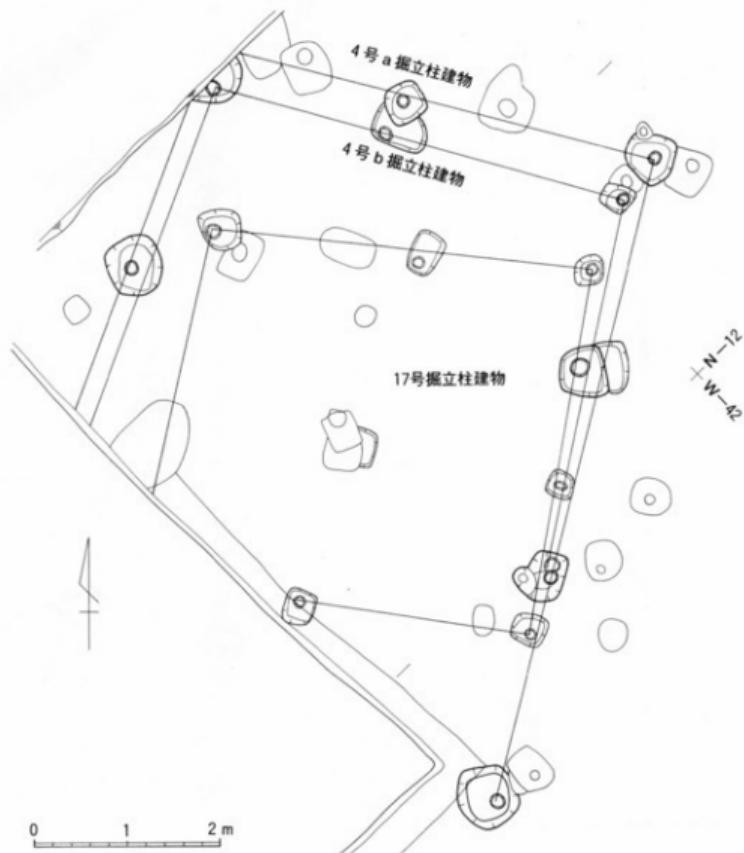


第13図 第3号掘立柱建物跡

〔規模〕 a・b共に桁行3間、梁行2間の南北棟と思われる。柱間は桁行でaが東側柱列で北から2.32、2.20、2.40m、bはaに切られて不明である。梁行は北側柱列でaが2.72m、bが東から2.60、1.92mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方はaが一辺50~54cmの方形ないし隅丸方形を呈しており、bが長辺36~60cm、短辺30~40cmの長方形を呈している。柱痕跡はaが径14~22cm、深さ24~36cmで円形を呈しており、bが径14~18cm、深さ16~41cmで円形を呈している。

〔埋土〕 a の埋土は概ね黒褐色シルト質砂であり、灰白色粘土を含んでいる。b の埋土は褐色シルト質砂である。



第14図 第4号a b・第17号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第4号掘立柱建物跡の北、9・10-Bに位置している。

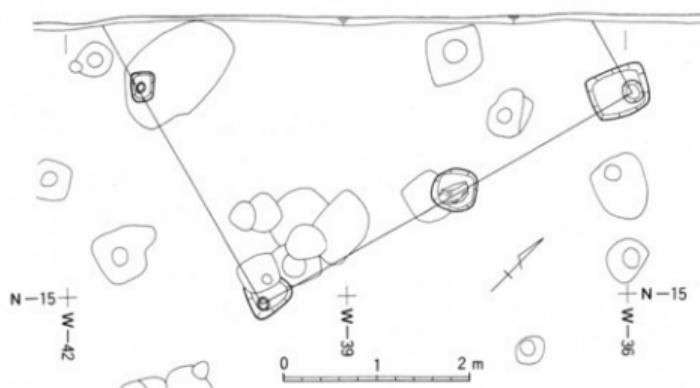
〔重複〕 第6号・7号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔規模〕 造構の大半が未掘のため規模は不明である。柱間は東側柱列で北から2.2、2.4m、南側柱列で2.6mである。柱痕跡は径が12~24cm、深さが15~35cmで円形を呈している。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は長辺が30~64cm、短辺が24~52cmの長方形を呈している。柱痕跡は径

が12~24cm、深さ15~28cmで円形を呈している。

〔埋土〕 埋土は褐色ないし黒褐色シルト質砂である。



第15図 第5号掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第5号掘立柱建物跡の北、10・11-B・Cに位置している。

〔重複〕 第5号・7号・8号a bと重複しているが、新旧関係は不明である。

〔規模〕 造構の大半が未掘のため規模は不明である。柱間は東側柱列が北から2.3、2.2m、南側柱列が2.5mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は一辺が54~74cmの隅丸方形を呈するものと、長軸が54~70cm、短軸が44~54cmの長方形を呈するものがある。柱痕跡は径が16~28cm、深さが20~30cmで円形を呈している。

〔埋土〕 概ね黒褐色シルト質砂である。

第7号掘立柱建物跡

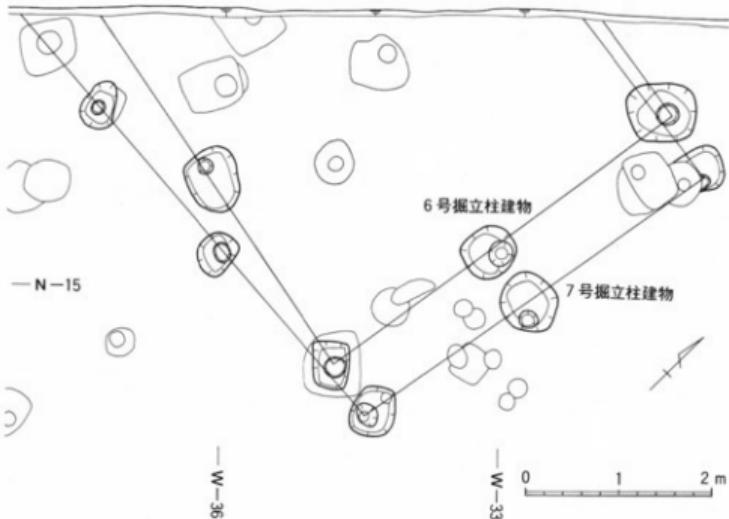
〔位置〕 調査区西側で第5号掘立柱建物跡の北、10・11-B・Cに位置している。

〔重複〕 第8号a b掘立柱建物跡に切られている。また、第5号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。

〔規模〕 柱行2間以上、梁行2間の東西棟である。柱間は柱行が南側柱列で西から2.0、2.36mである。梁行が東側柱列で北から2.34、2.04mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は一辺が40~64cmの隅丸方形を呈している。柱痕跡は径が16~20cm、深さが27~50cmで円形を呈している。

〔埋土〕 概ね黒褐色シルト質砂であり、埋土中に焼土が混入しているものがある。



第16図 第6号・第7号掘立柱建物跡

第8号a b掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第1号住居跡の西、12~15-B・Cに位置している。

〔重複〕 第8号aが第8号bを、第8号bが第7号掘立柱建物跡を切っている。また、第6号・9号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔規模〕 第8号a b共に桁行2間以上、梁行2間の東西棟である。柱間は梁行が北側柱列でaが2.6m、bが2.0m、南側柱列で西からaが2.5、2.84m、bが2.1、2.0mである。梁行が東側柱列で北からaが2.4、2.34m、bが2.06、2.06mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方はa・b共に一辺34~54cmの開丸方形を呈している。柱痕跡はaが径14~32cm、bが径14~20cmで、いずれも円形を呈している。

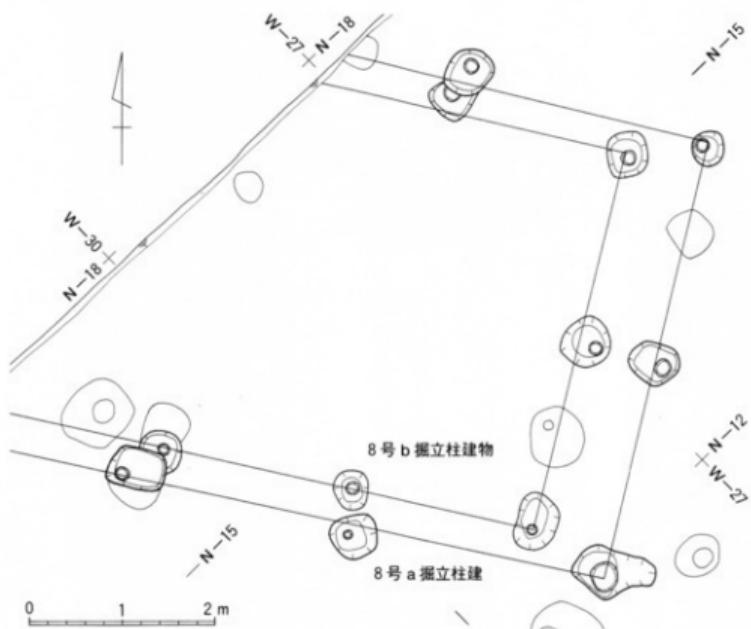
〔埋土〕 a・b共に黒褐色シルト質砂であり、aには灰白色粘土を含んでいるものがある。

第9号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第6号・7号掘立柱建物跡の東、12~14-C~Eに位置している。

〔重複〕 第1号住居跡を切っている。また、第8号a bと重複しているが新旧関係は不明である。

〔規模〕 桁行3間、梁行2間の南北棟である。柱間は桁行が東側柱列で北から1.90、2.34、2.14m、西側柱列で北から2.20、2.00、2.20mである。梁行が北側柱列で西から2.14、2.34m、南側柱列で西から2.34、2.10mである。



第17図 第8号a b 捜立柱建物跡

〔柱穴〕柱穴の掘り方は一辺が46~74cmの隅丸方形を呈している。柱痕跡は径が14~26cm、深さが29~42cmで円形を呈している。

〔埋土〕概ね黒褐色シルト質砂である。

第10号掘立柱建物跡

〔位置〕調査区西側で第9号掘立柱建物跡の南、9~11-F・Gに位置している。

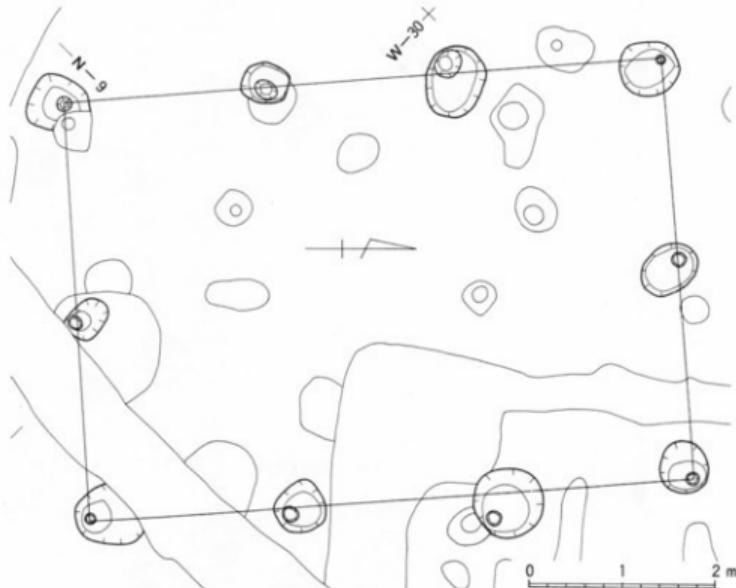
〔重複〕第11号掘立柱建物跡を切っている。また、第18号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔規模〕桁行3間、梁行2間の南北棟である。柱間は桁行が東側柱列で2.20m、西側柱列で北から2.30、3.00、2.10mである。梁行が北側柱列で西から2.26、2.26mである。

〔柱穴〕柱穴の掘り方は長辺が42~70cm、短辺が32~68cmの隅丸方形ないし長方形を呈している。柱痕跡は径が14~26cm、深さ35~48cmで円形を呈している。

第11号掘立柱建物跡

〔位置〕調査区西側で第9号掘立柱建物跡の南、9~11-F・Gに位置している。



第18図 第9号掘立柱建物跡

〔重複〕第10号掘立柱建物跡に切られている。また、第18号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔規模〕桁行3間、梁行2間の東西棟である。柱間は桁行が東側柱列で2.10m、西側柱列で2.00mである。梁行は北側柱列で西から2.06、2.00mである。

〔柱穴〕柱穴の掘り方は一辺が40~60cmの隅丸方形を呈している。柱痕跡は径が14~16cm、深さ27~39cmで円形を呈している。

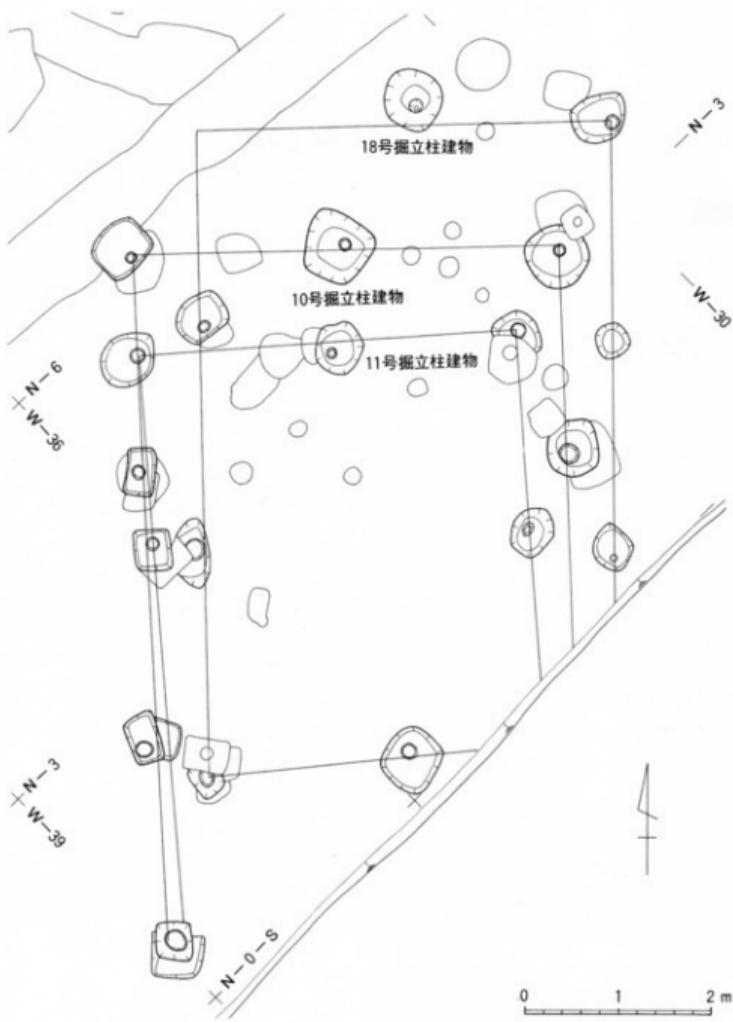
第12号掘立柱建物跡

〔位置〕調査区西側で第9号掘立柱建物跡の北東、15~17-C~Fに位置している。

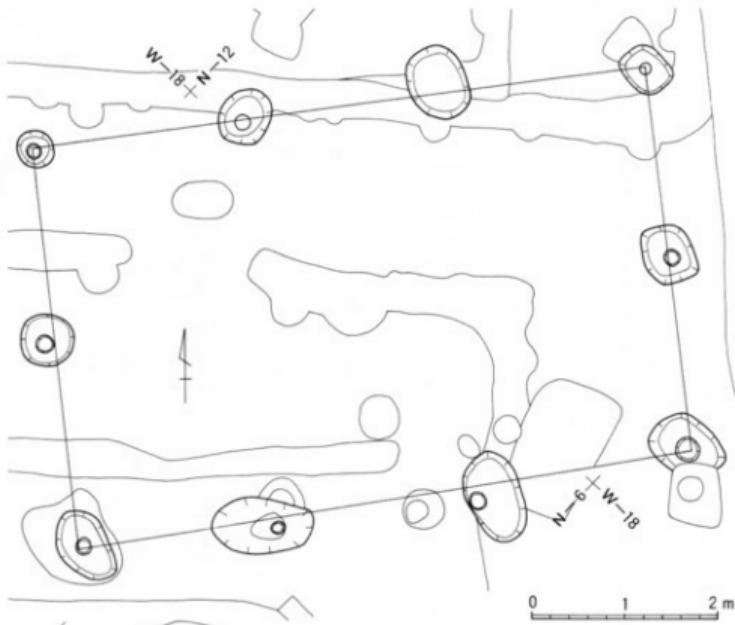
〔重複〕第1号・2号・4号住居跡を切っている。

〔規模〕桁行3間、梁行2間の東西棟である。柱間は桁行が北側柱列で西から2.40、2.00、2.40m、南側柱列で西から2.10、2.34、2.16mである。梁行が西側柱列で北から2.08、2.20m、東側柱列で北から2.08、2.08mである。

〔柱穴〕柱穴の掘り方は長軸が54~80cm、短軸が44~74cmの隅丸長方形を呈している。柱痕跡は径が16~20cm、深さが35~60cmで円形を呈している。



第19図 第10号・第11号・第18号掘立柱建物跡



第20図 第12号掘立柱建物跡

第13号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区中央で第12号掘立柱建物跡の東、18~20-E~Gに位置している。

〔重複〕 第3号a b住居跡、第13号掘立柱建物跡に切られている。

〔規模〕 桁行3間、梁行2間の東西棟である。柱間は桁行が北側柱列で西から1.92、2.20、2.28m、南側柱列で西から2.30、2.30、2.14mである。梁行が西側柱列で北から2.34、2.30m、東側柱列で北から2.24、2.30mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は長辺が56~64cm、短辺が46~56cmの長方形を呈している。柱痕跡は径が14~20cm、深さが40~54cmで円形を呈している。

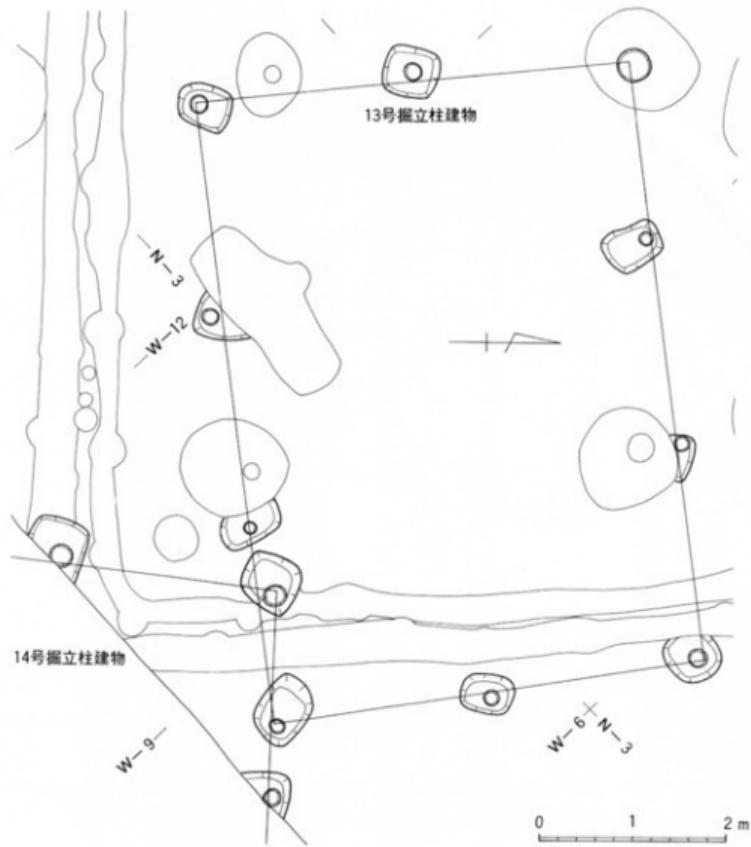
第14号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区中央で第13号掘立柱建物跡の南、19・20-Gに位置している。

〔重複〕 第3号a b住居跡、第13号掘立柱建物跡を切っている。

〔規模〕 道構の大半が未掘のため規模は不明である。柱間は北側柱列で2.08m、西側柱列で2.30mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は一辺が60~70cmの隅丸方形を呈している。柱痕跡は径が20~24cm、深さが36~42cmで円形を呈している。



第21図 第13号・第14号掘立柱建物跡

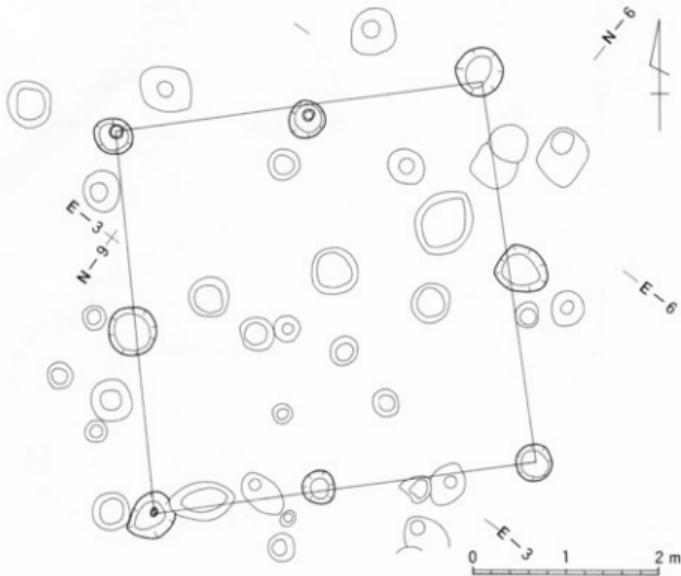
第15号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区中央で第5号住居跡の南東、23・24-E・Fに位置している。

〔重複〕 確認されなかった。

〔規模〕 桁行2間、梁行2間の建物である。柱間は北側柱列で西から2.06、1.90m、南側柱列で西から1.80、2.34m、東側柱列で北から2.20、2.08m、西側柱列で北から2.14、2.06mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は長軸が38~56cm、短軸が36~50cmの楕円形ないし円形を呈している。柱痕跡は径が14~20cm、深さが20~34cmで円形を呈している。



第22図 第15号掘立柱建物跡

第16号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第1号掘立柱建物跡の北、4・5-D・Eに位置している。

〔重複〕 第2号掘立柱建物跡を切っている。また、第1号a b掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔規模〕 桁行2間、梁行2間の純柱建物である。柱間は北側柱列で1.60m、南側柱列で西から1.60、1.80m、東側柱列の総長が3.40m、西側柱列で1.80mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は一辺が30~48cmの方形を呈している。柱痕跡は径が10~12cm、深さが20~37cmで円形を呈している。

第17号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第5号掘立柱建物跡の南、7・8-B・Cに位置している。

〔重複〕 第4号a b掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔規模〕 桁行2間、梁行2間の建物（純柱建物と思われる）である。柱間は北側柱列が西から2.20、1.84m、南側柱列で2.48m、東側柱列が北から2.32、1.60mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は長辺が38~48cm、短辺が30~34cmで長方形を呈している。柱痕跡は径が12~20cm、深さが20~47cmで円形を呈している。

〔埋土〕 概ね黒褐色砂である。

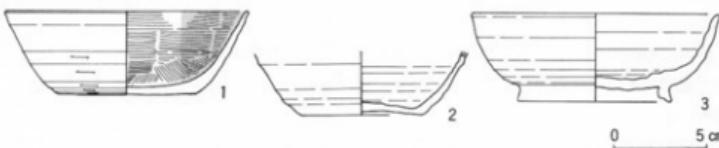
第18号掘立柱建物跡

〔位置〕 調査区西側で第9号掘立柱建物跡の南、10~12-F・Gに位置している。

〔重複〕 第10号・11号掘立柱建物跡に切られている。

〔規模〕 桁行3間、梁行2間の南北棟である。柱間は桁行が東側柱列で北から2.34、2.32m、西側柱列で北から2.40、2.46mである。梁行は北側柱列で2.10m、南側柱列で2.40mである。

〔柱穴〕 柱穴の掘り方は一辺が36~64cmの隅丸方形を呈している。柱痕跡は径が14~22cm、深さが9~35cmで円形を呈している。



番号	種別	外観・調査	内実・調査	口径cm	底径cm	深度cm	層考	写真図版
1	土器跡	リクロ→同軸ヘラケズリ〔底〕 同軸ホ切り→同軸ヘラケズリ	ヘラケキト異色細縫	13.0	7.3	4.45	Pit 101出土	25
2	須恵器	36 ロクロ [底] 同軸ホ切り	ロクロ	—	6.4	(3.4)	Pit 101・103出土	—
3	+高台付	ロクロ [底] 同軸ヘラ切り→ヘラケズリ	ロクロ	13.2	8.2	4.7	—	36

第23図 ピット出土遺物

3. 土 壤

土壤は13基確認された。土壤の大半は調査区のグリットE・F・Gのライン上で、住居跡、掘立柱建物跡の付近で確認されている。土壤は形や大きさも違っており、出土遺物も少ないので時期や性格が不明瞭なものがほとんどである。以下、主なものについて説明する。

第1号土壤

〔位置〕 調査区やや西側で第1号住居跡の南東、14-Gに位置している。

〔重複〕 なし

〔形態・規模〕 平面形は梢円形を呈しており、長軸約1.24m、短軸約0.96m、深さ約18cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 堆積土は暗褐色砂の1層のみ確認された。層中には少量の炭化物を含んでいる。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器の破片が僅かに検出された。

第3号土壤

〔位置〕 調査区中央で第3号住居跡の南側、17-F・Gに位置している。

〔重複〕 第3号住居跡に切られている。

〔形態・規模〕 平面形は梢円がやや崩れた形を呈している。長軸約1.86m、短軸約1.40m、深さ約24cmである。壁、底面共にやや凸凹している。

〔堆積土〕 堆積土は3層から成る。黒褐色砂、暗褐色砂の自然堆積土である。層中に多量の炭

化物を含むものがある。また、10~20cm程の礫を含んでいる。

〔出土遺物〕 須恵器壺・甕、鉄斧等が出土している。

第4号土壤

〔位置〕 調査区西側で第1号a b掘立柱建物跡の南東、4・5-Gに位置している。

〔重複〕 なし

〔形態・規模〕 遺構の半分以上が未掘で形態は不明瞭であるが、楕円形を呈していると思われる。確認された長さが長辺5.12m、短辺1.40mである。壁は外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 黒褐色砂および褐色砂の自然堆積が3層確認された。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器の小破片が僅かに検出された。

第5号土壤

〔位置〕 調査区西側で第4号土壤の北、8-F・Gに位置している。

〔重複〕 第3号掘立柱建物跡を切っている。

〔形態・規模〕 平面形は楕円形を呈しており、長軸約2.74m、短軸約1.46m、深さ約28cmである。底面はやや丸みがあり、壁は外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 自然堆積の黒褐色砂である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器の小破片が僅かに検出された。

第6号土壤

〔位置〕 調査区東側で、28・29-Bに位置している。

〔重複〕 第9号溝跡を切っている。

〔形態・規模〕 平面形は楕円形を呈しており、長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さ約14cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 自然堆積の黒褐色シルト質砂層である。層中に灰白色火山灰、高師小僧を含んでいる。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器の小破片が僅かに検出された。

第7号土壤

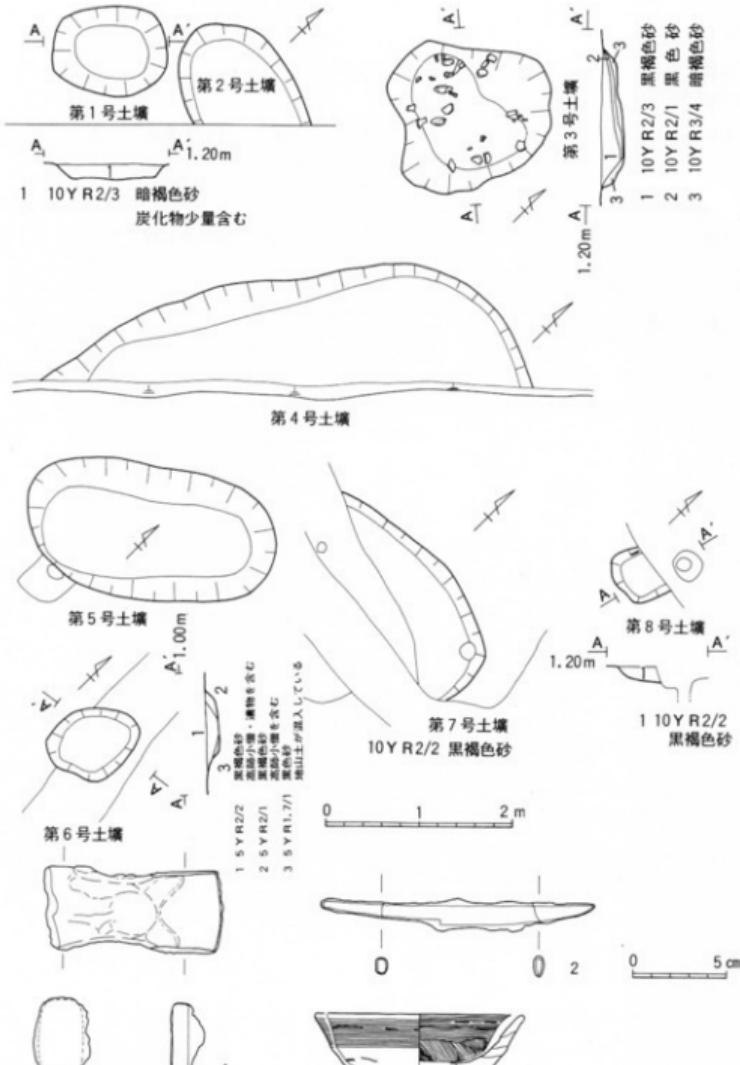
〔位置〕 調査区東側で、第6号土壤南側の27-Dに位置している。

〔重複〕 第9号・11号溝に切られている。

〔形態・規模〕 遺構の大半を溝跡に切られており、平面形は不明瞭であるが楕円形を呈していると思われる。残存長は長軸約2.4m、短軸約1.0m、深さ約12cmである。断面形は床面より緩やかに傾斜しており、床面と壁の境が不明瞭である。

〔堆積土〕 自然堆積の黒褐色砂である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器の小破片が僅かに検出された。



第24図 土壤実測図・土壤出土遺物

番号	種別	出土位置	底5cm	幅 cm	厚5cm	写真範囲	番号	種別	出土位置	底5cm	幅 cm	厚5cm	写真範囲
1	鉢 豊 手	第3号土壤 3層	9.5	4.5	3.0	29	2	刀 子	第8号土壤 底面	14.6	1.3	0.65	30
2	縁 田	出土位置	外 壁 調査						内 面 調査	11.6cm	既往	既往	写真範囲
3	土器器身	第12号土壤	(12) ヨコナダ(深一浅) 細いヘラナ?						器ナデ	11.2	6.2	3.4	27

第8号土壙

〔位置〕 調査区西側で第1号住居跡の南、13-Eに位置する。

〔重複〕 第1号住居跡に切られている。

〔形態・規模〕 遺構の北側を住居に切られているため平面形は不明瞭であるが、隅丸方形を呈していると思われる。規模は東西約60cm、南北約42cm（残存長）、深さ約17cmである。

〔堆積土〕 自然堆積の黒褐色砂である。

〔出土遺物〕 鉄製品（刀子）、その他に土師器・須恵器の小破片が僅かに検出された。

4. 焼土遺構

調査区西側の9-Bで1基確認された。平面形は梢円形を呈しており、規模は長軸約1.33m、短軸約0.82m、深さ約40cmである。焼土は遺構全面で確認された。

5. 溝跡

溝跡は12条確認され、調査区の東側に多く見られる。溝跡は「く」の字状を呈しており、何らかの区画溝と思われるものと、直線的なものの2種類が見られる。特に東側の大きな「く」の字状の溝は、平坦面と斜面の境にあり、遺跡全体を区画している溝と思われる。以下、主なものについて説明する。

第1号溝跡

〔位置〕 調査区南東側で第2号溝跡の西側、平坦面と斜面の境に位置する。

〔重複〕 第3号・6号・7号溝を切っている。

〔形態・規模〕 調査区南東部の西壁から東へ約3mのところで、平坦面に沿って北にいったん曲がり約23m行ったところでまた東側に曲がっている。溝の幅は約1.7m、深さ約16cmで、断面形は「U」字状を呈している。

〔堆積土〕 黒褐色砂質シルトの自然堆積土が確認された。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器が検出された。

第2号溝跡

〔位置〕 調査区南東側で第1号溝跡の東側に位置する。

〔重複〕 第10号土壙を切っている。

〔形態・規模〕 ほぼ第1号溝跡と平行して北に延びている。ただし、第1号溝のように東側に曲がるかどうかは未掘部分にかかるので不明であるが、おそらくまっすぐに延びていると思われる。溝の幅は約80~100cm、深さ約15~30cmで、断面形は底面がやや平坦であり、壁は底面より急傾斜で立ち上がっている。

〔堆積土〕 黒色砂質シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器片が検出された。

第7号溝跡

〔位置〕 調査区南東側で第8号溝の南、23~28-Lに位置している。

〔重複〕 第1号溝跡に切られている。

〔形態・規模〕 調査区西壁より約16m東にまっすぐ延びている。溝の幅は約90~100cm、深さ約10~15cmで、断面形は底面がやや平坦で、壁は底面より緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 概ね黒褐色砂質シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器の小破片や土錘が検出された。

第8号溝跡

〔位置〕 調査区中央部付近で第3号住居の東側に位置している。

〔重複〕 多数のピットと重複している。

〔形態・規模〕 調査区西壁より北に約15m延び、先端で西に少し曲がっている。溝の幅は約40cm、深さ約5cmで、断面形は「U」字状を呈している。

〔堆積土〕 概ね黒褐色砂質シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器の小破片が僅かに検出された。

第9号溝跡

〔位置〕 調査区東側で第5号住居跡の東、25~29-B~Dに位置している。

〔重複〕 第6号土壤に切られており、第7号土壤、第11号溝を切っている。

〔形態・規模〕 平面形は「V」字状を呈しているが、南北方向は地形が平坦面と斜面の境に位置しており、地形の影響を受けていると思われる。幅は約80~90cm、深さ約14~20cmで、断面形は底面がほぼ平坦であり、壁は底面より外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕 自然堆積の8層からなる。概ね暗褐色砂質シルトであり、一部に極暗赤褐色砂質シルトが見られる。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器の小破片が僅かに検出された。

第12号溝跡

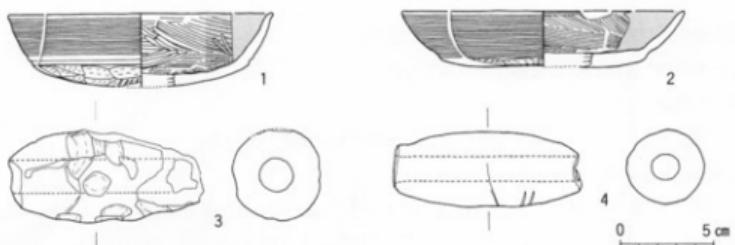
〔位置〕 調査区西側で第1号掘立柱建物跡の西、1·2-D~Gに位置している。

〔重複〕 なし

〔形態・規模〕 調査区北壁から南壁に向かってまっすぐに約11m延びている。幅は約1.6m、深さ約35~50cmである。断面形は底面がほぼ平坦であり、壁面は底面よりやや垂直ぎみに立ち上がり、中間地点で外傾しながら立ち上がっている。

〔堆積土〕 概ね黒褐色砂質シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器の小破片が僅かに検出された。



番号	種別	外観調整	内面調整	口径cm	底径cm	高さcm	場所	参考文献
1	土師器 壺	(口) ヨコナギ(体-底) ハラメ?→ヘラケズリ	ハラメガキ+黒色處理	14.0	—	3.85	9号溝出土 丸底	22
2	土師器 壺	(口) ヨコナギ(体-底) ヘラケズリ	ハラメガキ+黒色處理	15.1	—	2.95	9号・11号溝出土	22
3	土師器 壺	(口) ヨコナギ(体-底) 1.8 (調整) ナゲ? 回転系 7溝	33					
4	土師器 壺	(口) ヨコナギ(体-底) 4.0 (内底) 1.4 (調整) タグ? 11号溝出土	34					

第25回 溝跡出土遺物

6. その他の遺物

調査区内は遺構確認面直上まで耕作等の搅乱が及んでおり、遺構外から多くの遺物が出土している。出土遺物は縄文土器、石器、土師器、須恵器、手捏ね土器、土製品、鉄製品などが検出された。

〔縄文・弥生時代〕 縄文土器片が僅かに検出され、また、アメリカ式石鎌が1点検出された。

〔古墳時代〕 土師器壺・甕の破片が僅かに検出された。土師器甕は外面調整がハケメで球形を呈しており、古墳時代前期のものと考えられる。

〔奈良・平安時代〕 土師器壺・椀・蓋・甕・瓶、須恵器壺・高台付壺・蓋・甕・壺、土製品（土錘・紡錘車）などが検出された。

土師器の壺は非ロクロ使用で有段丸底のものと有段平底のもの、無段平底のもの、ロクロ使用で無段平底（回転糸切り）のものがある。これらはいずれも内黒処理がなされている。このほかに無段平底で両面が黒色処理されているものもある。

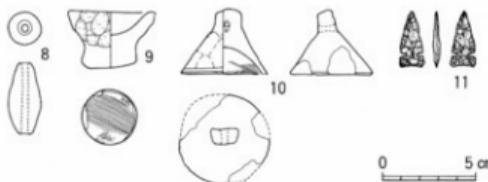
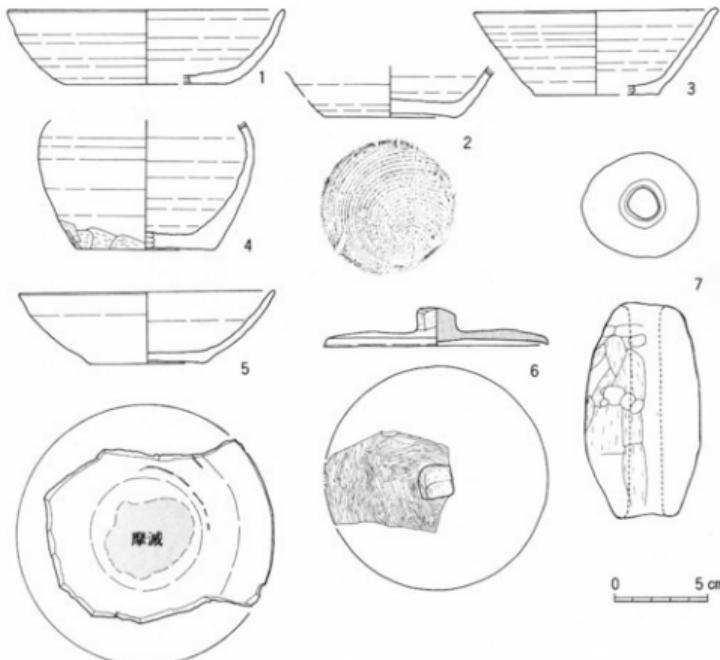
土師器の蓋は内、外面ともに黒色処理が施され、つまみは四角柱状のものがついている。

土師器甕は口縁部と体部の境に段を有する非ロクロ使用のものと、無段で外面へラケズリ調整で内面が黒色処理が施されている非ロクロ使用のもの、ロクロ使用のものがある。

須恵器の壺は底部が静止糸切りの後へラケズリ調整のもの、回転へラ切り無調整のもの、回転へラ切りの後へラケズリのもの、回転糸切り無調整のもの、回転糸切りの後へラケズリ調整が施されるものが検出された。

須恵器の蓋は擬宝珠形のつまみをもち、天井部は低平で回転へラケズリ調整が施され、口縁部が短く折れ曲がるもの（壺蓋）と、つまみ部が欠損しているが口縁部がやや長めに折れ曲がるもの（短頸壺の蓋）が検出された。

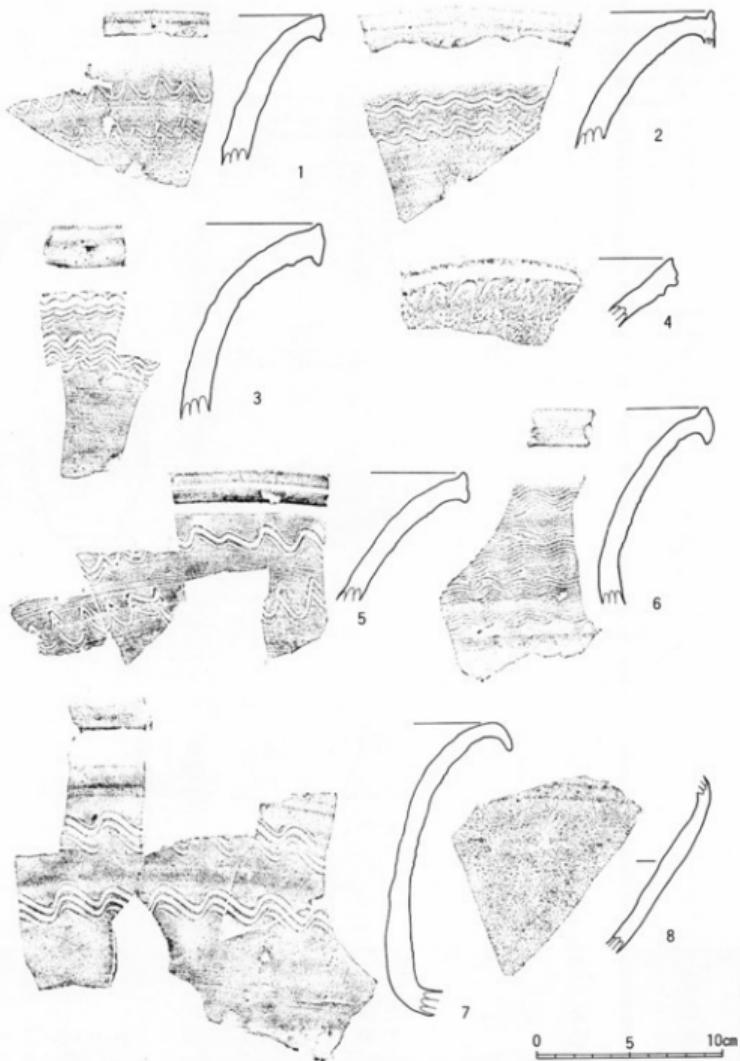
須恵器の甕は復元可能なものがなかった。外面調整は体部上半に平行タタキ目が施されてい



番号	種別	外観	測定	内面観察	寸法cm	底径cm	最高cm	備考	写真回数
1	漆器	横口	(底) 手打ちハラケズリ	ロクロ	14.8	8.6	4.0		40
2	漆器	横口	(底) 回転赤切り	ロクロ	—	7.0	(2.7)	底部L-Tの識別	—
3	漆器	横口	(底) 手打ちハラケズリ	ロクロ	13.0	6.6	4.5		41
4	漆器	横口	(底) 手打ちハラケズリ	ロクロ	—	8.4	(6.9)		—
5	漆器	横口	(底) 回転赤切り	ロクロ	13.7	6.0	3.8	内側底面掌溝 利用現か	42
6	土器	ハラミザキ+黑色乳突	[つまみ] ハラケズリ	ハラミザキ+黑色乳突	12.0	—	2.1	[つまみ幅] 1.6cm	43

番号	種別	外観	その他の(半径cm)	写真回数
7	土器	(底径) 11.5 (外径) 6.1 (内径) 0.7 (溝) ハラケズリ・脚柱痕	51	
8	土器	(底径) 3.8 (外径) 1.8 (内径) 0.35	52	
9	土製品	(口径) 4.7 (底径) 3.0 (高さ) 3.1	45	
10	土器?	(底) 6.8 (残存高) 3.5 (溝) 0.3 (溝) ハラケズリ	46	
11	石器	(底径) 2.0 (高さ) 0.8 (厚さ) 0.4	47	

第26図 その他の表採遺物



番号	種 別	特 徴	- そ の 他 -	写真図版	番号	種 別	特 徴	- そ の 他 -	写真図版
1	骨器 鍬	(外側) 流紋波綾文 (内側)	ロクロ	表掲	5	骨器 鍬	(外側) 流紋波綾文 (内側)	ロクロ→トド	表掲
2	骨器 鍬	(外側) 流紋波綾文 (内側)	ロクロ	表掲	6	骨器 鍬	(外側) 流紋波綾文 (内側)	ロクロ→トド	表掲
3	骨器 鍬	(外側) 流紋波綾文 (内側)	ロクロ	表掲	7	骨器 鍬	(外側) 流紋波綾文 (内側)	ロクロ	表掲
4	骨器 鍬	(外側) 流紋波綾文 (内側)	ロクロ	表掲	8	骨器 鍬	(外側) 軽いラケズリ→流紋波綾文 (内側)	ロクロ→トド	表掲

第27図 その他の表掲遺物

るものと、ロクロ調整だけが認められるものとがある。また、口縁部外面に波状沈線文があるものとないものが検出された。

V 田道町遺跡C地点出土木簡について

木簡は調査区西側で第3号掘立柱建物跡北西隅の柱穴を切っているピットから出土した。木簡は柱穴掘り方の底面で文字面を下にして、ほぼ水平状態で検出されたので、礎盤として再利用されていたものと考えられる。この木簡の鑑定を国立歴史民俗博物館の平川南教授にお願いした。以下、平川教授の鑑定の結果を要約して記載する。木簡の鑑定結果についての詳細は本報告で行うこととします。

1. 形 状

木簡の遺存状態は、腐食が著しく、非常に脆弱であった。（東北歴史資料館に保存処理を依頼）表面は上部のみ墨痕が明瞭であるが、下半分は腐食により木簡面が失われ、ほとんど墨痕が消えかかっている。裏面は加工痕が認められなかった。木簡の現状の大きさは、長さが約30.2cm、幅が約7.75cm、厚さが約1.4cmである。

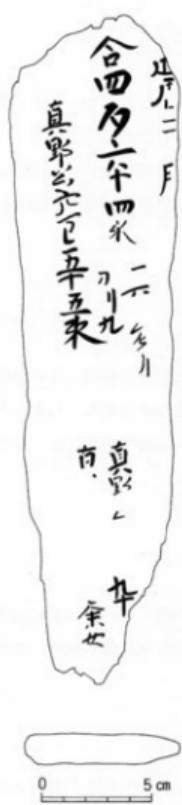
2. 内 容

右側面を欠くが、初行は年号「延暦」（782～806）とみて間違いなく、中央上部に記された「合四百六十四（束）」は総計部分で、次行の「真野公穴万呂五十五束」は内訳の一部である。

3. 木簡の性格と意義

本木簡は、延暦11年（792）分の出舉額を記録した木札であり、「真野公穴万呂五十五束」をはじめとして、おそらくは十人程度の総計が「合四百六十四束」（十人とすれば、一人平均四十六束程度）で、現状はそのうちの八人の歴名（女性を含む）を確認できる。また、本遺跡近くに位置する現石巻市真野は、「真野公」と深く関連するものと推測できる。

現地名+公（君）姓は、律令国家に服属した蝦夷に与えられた夷姓とされた。本木簡がその「真野公」集団を列記している点、律令国家に服属した牡鹿地方の有力な蝦夷の一つと考えられる「真野公」集団に対して、出舉を「内国」なみに実施している点、きわめて注目すべきである。また、出舉制について、他の出土資料等との比較から、より一層具体的にその実施形態を明らかにしうる点、きわめて重要な資料といえる。



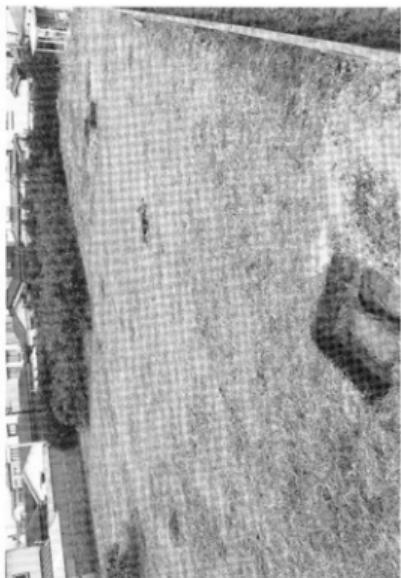
第28図 C地点出土木簡

合四百六十四束 真野公穴万呂五十五束 東力 刀部九 余文	真野 公 穴 万 呂 五 十 五 束								
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

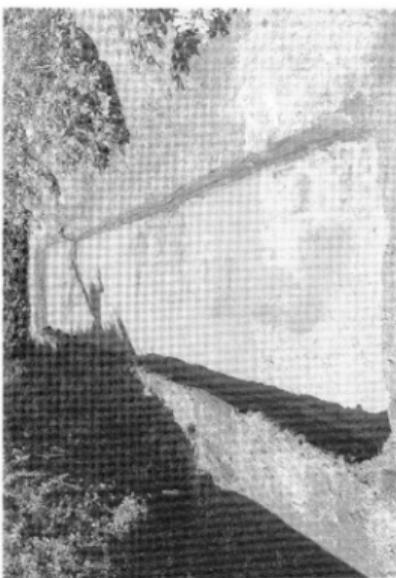
VI ま と め

1. 田道町遺跡B・C地点は石巻市田道町一丁目から二丁目にかけて所在し、標高1.5~1.8mの沖積平野の微高地上に立地している。
2. 調査はB・C地点を試掘した結果、B地点は開田等で削平されており、遺構等が検出されなかったのでトレンチ掘りで終了した。C地点は遺構・遺物が検出されたので全面発掘を行った。
3. 発見された遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒が確認され、奈良・平安時代のものは竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡21棟、土壙7基、焼土遺構1基、溝跡12条などが確認された。その他に時代不明の土壙が6基が確認されている。
4. 出土遺物は、縄文土器、アメリカ式石錐、古墳時代前期の土師器甕、奈良・平安時代の土師器壺・高台付壺・高壺・椀・瓶・甕・蓋・土錘・紡錘車・手捏ね土器など、須恵器壺・高台付壺・高壺・蓋・甕・壺などが、その他に土錘・鉄製品・銅製帶金具・木簡などが検出された。
5. 遺構は平坦面に立地している。住居跡は中央部に集中しており、掘立柱建物跡は西側に集中している。また、東側が緩やかに傾斜しており、平坦面と斜面の境に溝が巡っている。これらの溝は遺跡を区画している溝と思われ、溝の何条かは一部が折れ曲がって途切れたり、また、その周辺に多数のビットが検出されていることから門があった可能性を考えられる。
6. 本遺跡は区画溝が巡らされ、住居跡も8~10mと大型であり、掘立柱建物も伴っている。また、住居跡からは銅製帶金具が、掘立柱建物跡からは木簡が出土していることから、一般集落ではなく公の施設の可能性が考えられる。
7. 本遺跡は古墳時代が前期（塩釜式）が1時期、奈良・平安時代の住居跡は3~5時期、掘立柱建物跡は7~9時期に区分される。
8. 本遺跡出土の木簡は「延暦11年（792）分の出拳船額を記載した木札」であり、「真野公」の人名の記載は、蝦夷系豪族に特有の「公」の姓であることから、本木簡は牡鹿郡内に蝦夷系豪族が存在していたことを示す資料である。

Ⅶ 写真図版



B地点近景



B地点B トレンチ

B地点C トレンチ



B地点A トレンチ断面



田道町遺跡B地点

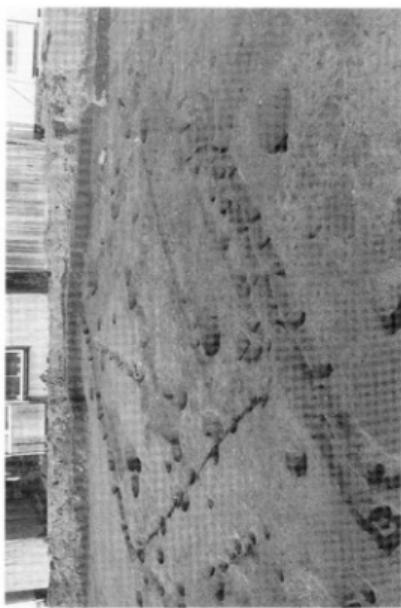
田舎町溝跡 C 地点全景



第5号住居跡

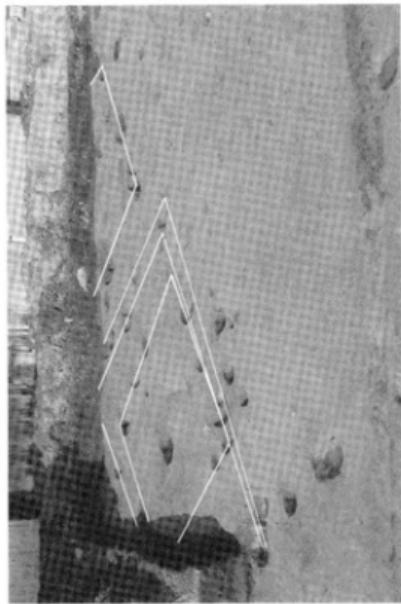


第2・4号住居跡

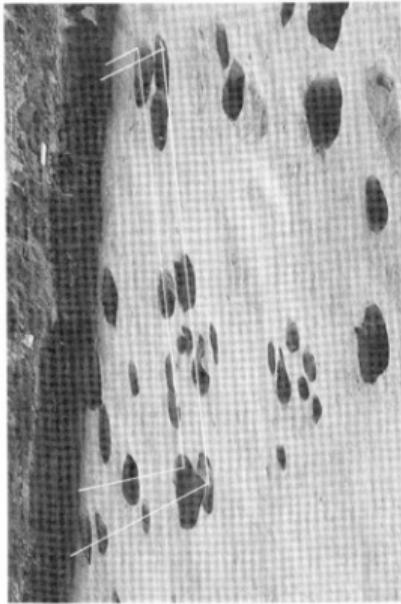


第3号a b住居跡

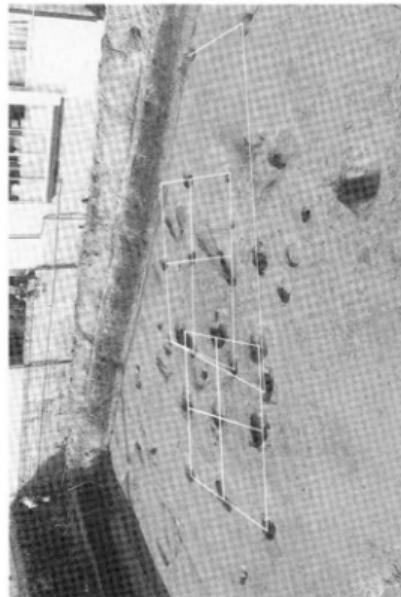




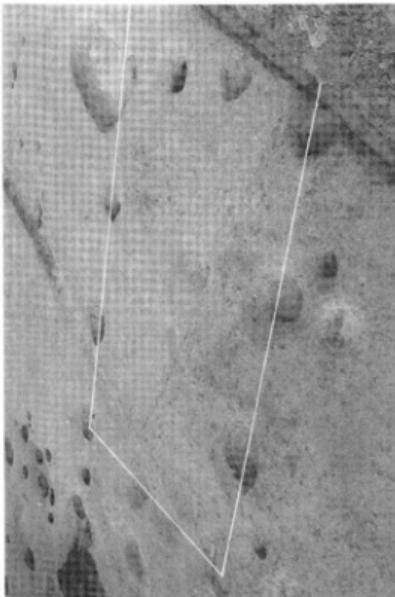
第4号a b · 5号·17号振立柱建物跡



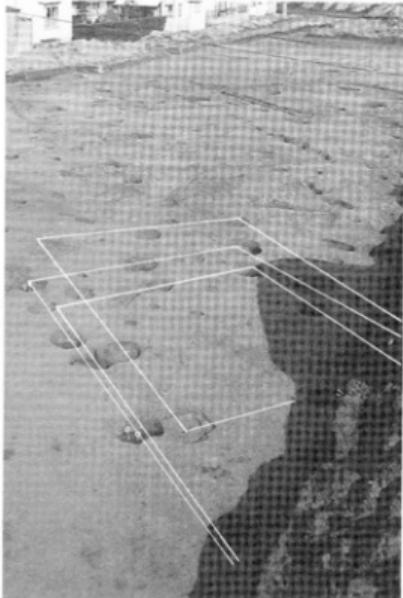
第6·7号振立柱建物跡



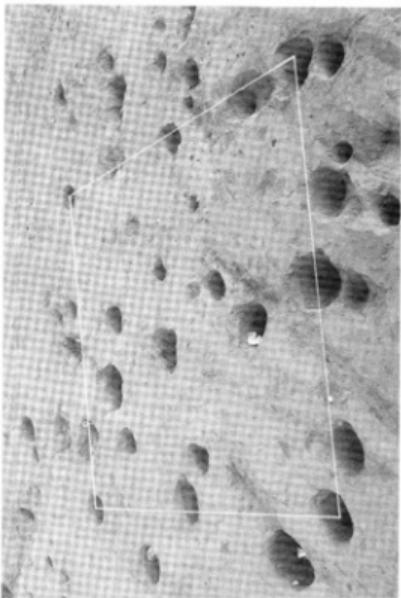
第1号a b · 2号·16号振立柱建物跡



第3号振立柱建物跡



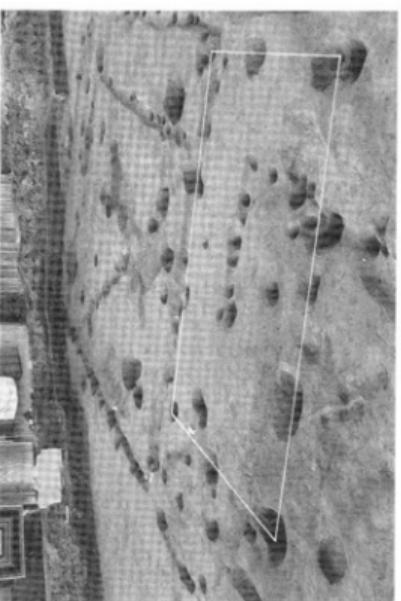
第10·11·18号掘立柱建物跡



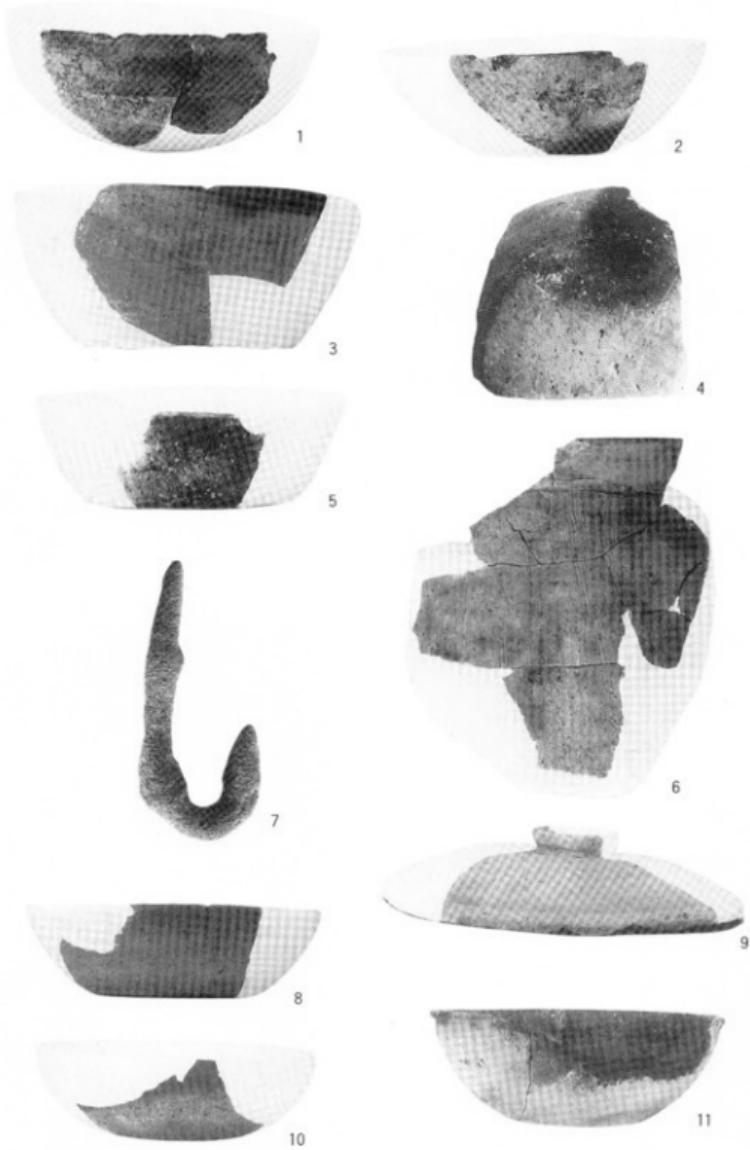
第15号掘立柱建物跡



第8号 a b · 9号掘立柱建物跡



第12号掘立柱建物跡



1 ~ 7 1号住居跡

8 · 9 2号住居跡

10 · 11 3号a住居跡



12



13



14



15



16



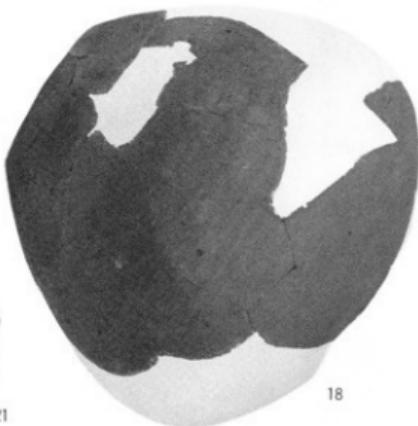
17



19



20



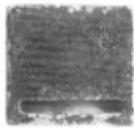
18



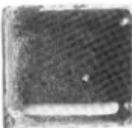
21



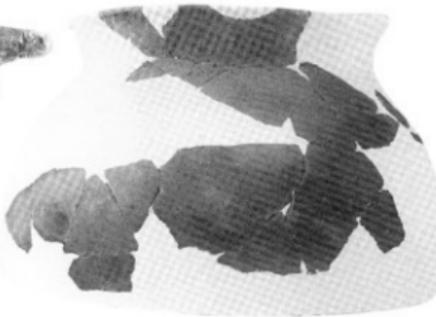
22



23 a



23 b

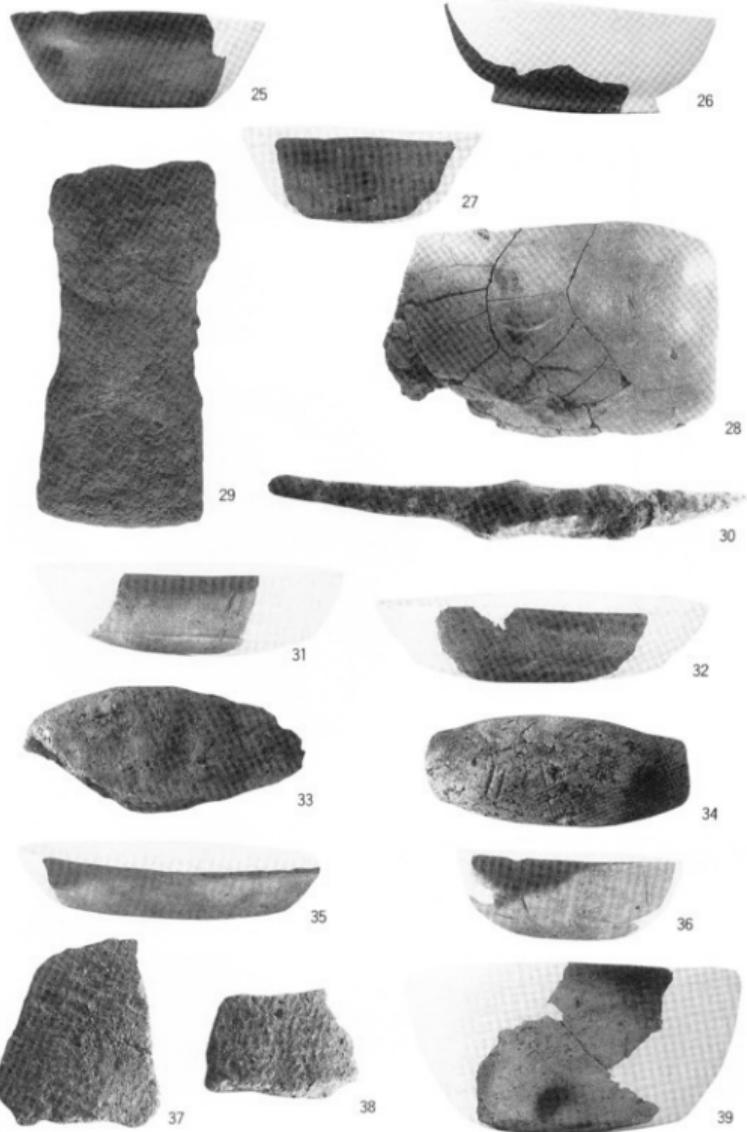


24

12~22 3号 a 住居跡

23 3号 b 住居跡

24 5号住居跡



25・26 ピット出土

27~30 土壌出土

31~34 溝出土

35~39 表採



40



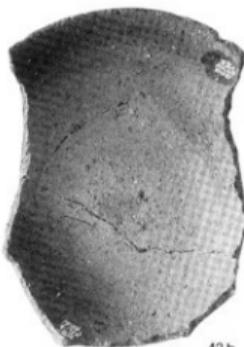
41



42 a



43



42 b



44



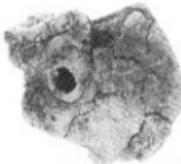
45



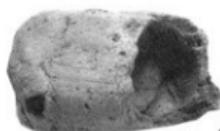
46



47



48



49



50



51



52



53

40~53 表採



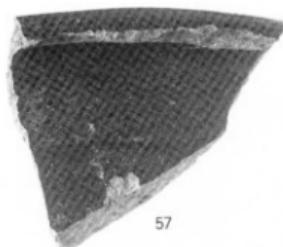
54



55



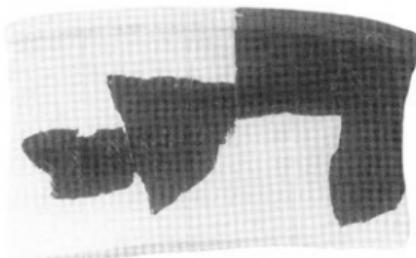
56



57



58



59



61

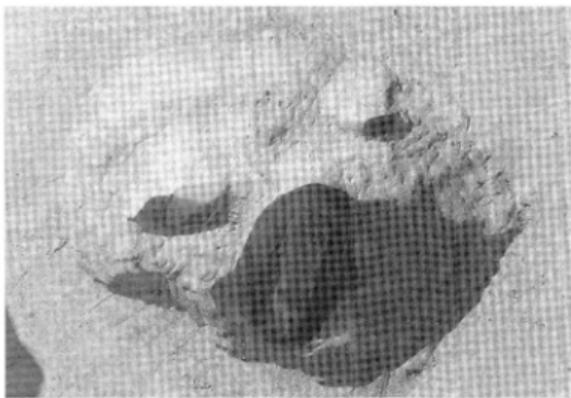


60



62

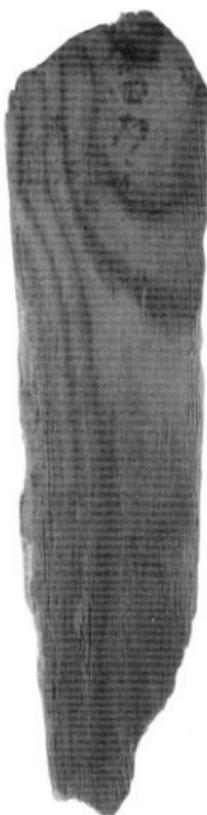
54~62 表採



木簡出土状況



赤外線テレビ撮影



C地点出土木簡

石巻市文化財調査報告書第5集
田道町遺跡 —B・C地点発掘調査概報—

1993(平成5)年3月31日発行

編集 石巻市教育委員会
発行 石巻市教育委員会
〒986 宮城県石巻市日和が丘一丁目1番1号
☎ 0225-95-1111㈹
印刷 株式会社 鈴木印刷所
〒986 宮城県石巻市蛇田字新谷地前121
☎ 0225-22-4101㈹

1993©